PERIODICAL

#53

P. O. F. I. LIBRARY
MAR 9 1959
FISH & WI[illegible]

鮪漁業　第五十三号　昭和三十三年十月十日発行　（毎月一回十日発行）
昭和三十一年二月二十三日　第三種郵便物認可

鮪漁業

Tuna Fishing

— 深夜の揚縄作業 —

58

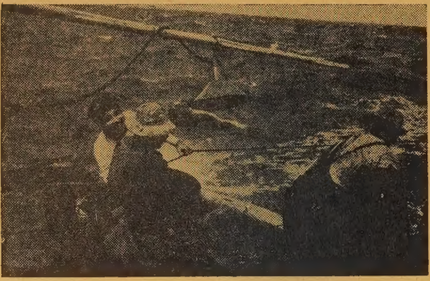
鮪漁業研究会

No. 53, 1958

Oct 10

倉敷
ビニロン
クレモナ
万漁

鮪延縄◆ロープ◆漁網



くさらない
使いやすい
値も安い

倉敷レイヨン株式会社

本社　大阪市北区梅田2（第一生命ビル）
東京事務所　東京都中央区日本橋室町2の4

◇新時代の冷凍機◇
（高速多気筒）

ダイヤ冷凍機

（新三菱重工製）

漁船船舶冷凍装置・製氷冷蔵凍結施設
設計・製作・施工

株式会社 **東洋製作所**

本社・工場　東京都品川区東品川5の61
電話大崎（49）代表2171—9番（49）2170.6004番 営業部直通
営業所　大阪市北区梅田町47（新阪神ビル）
電話（36）代表0974—5（36）2171—9（内線350—1）

――目　次――

鮪漁船紹介　第12福生丸　第26住吉丸

鮪漁場図　（昭和33年1月操業）

三崎他二港の水揚調査を主体とする遠洋鮪漁業の考察（昭和33年1月現況）……1

1. 調査の概要……1

2. 漁況の概要……1

3. 各海区の漁況……2

A．赤道以南140°W以東の漁場……2

B．赤道以北180°―140°Wの漁場……3

C．赤道以南180°―140°Wの漁場……4

D．北部太平洋漁場……5

E．旧南洋庁沿海漁場……7

F．ソロモン以南漁場……7

G．東部印度洋漁場……8

H．中，西部印度洋漁場……10

月別，漁場別，鮪類漁獲調査表（昭和33年1月操業分）別表1……12

月別，漁場別，鮪類体長組成表（昭和33年1月操業分）別表2……16

鮪類水揚価格表（三崎）昭和33年7月，8月……24

印度洋の漁況（鮪漁業講演会講演要旨）……南海区水産研究所 技官 三村皓哉……25

ゴウシュウマグロの漁場及び東部赤道海域に於けるメバチとキハダの漁場（鮪漁業講演会講演要旨）

南海区水産研究所 技官 上村忠夫……27

鮪類標識放流について……32

海のおとぎばなし……まえだ ひろし……33

業界メモ……34

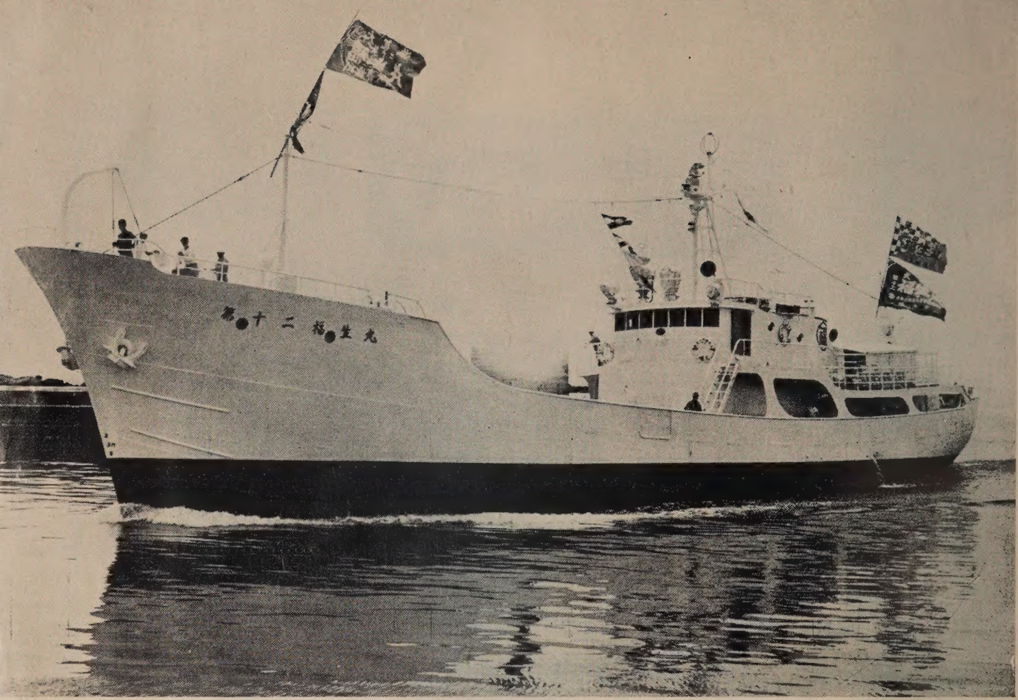
― 表紙写真　海上電機　渡辺氏提供 ―

営業内容　綿 クレモナ　鮪延縄 綿撚糸 製造販売

倉敷レイヨン株式会社　クレモナ延縄指定工場

山田撚糸株式会社

本社工場　八尾市大字亀井　電話（東住吉）559・2113
東京営業所　東京都品川区西戸越二ノ六七二　電話（荏原）6533



第 12　福 生 丸

船主	福島福一（三浦市）	
造船所	株式会社 山西造船鉄工所	
主要寸法		長40.20m×幅7.20m×深3.60m
総屯数		316.11屯
魚艙容積		339m^3
燃料油艙		160m^3
速力		11.88節
主機	デーゼル650HP（赤阪鉄工）	1基
補機	デーゼル200HP（　〃　）	2基
無線	200W，100W（三崎無線）	各1基
冷凍装置	日新興業設計施工 アンモニヤ直膨式　40HP	2基
レーダー（東京計器），方探（光電），魚探（海上電機），M.C.P.（東京計器）其の他		各1式
竣工		昭和33年6月17日

各種漁船用デ

株式会社　赤

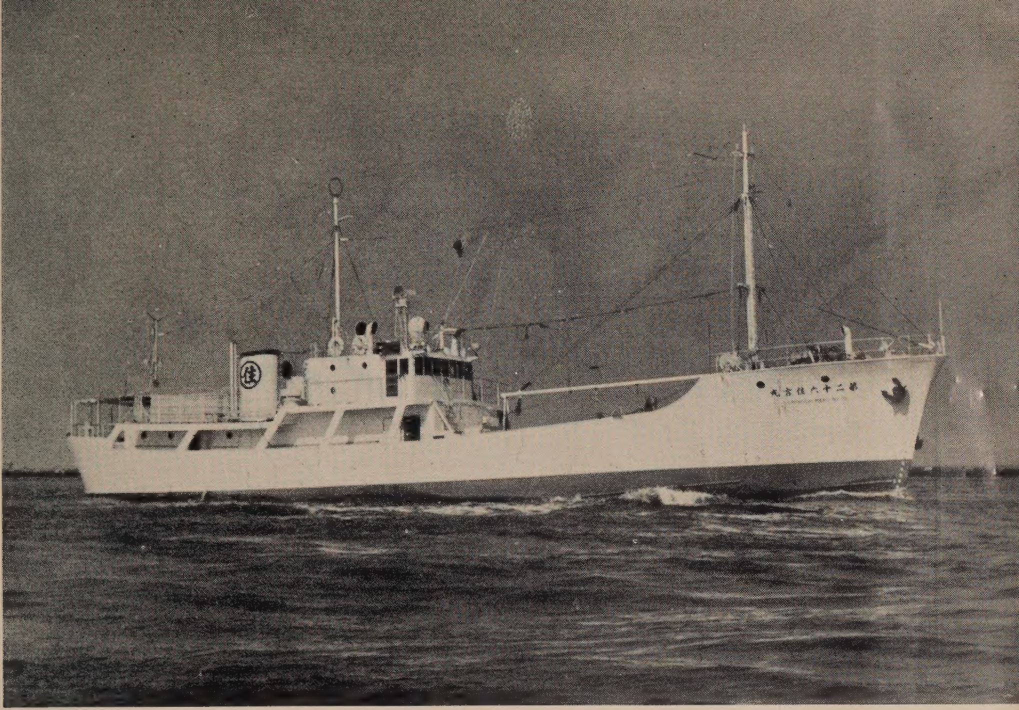
本　　社　東京都中央区銀
北海道出張所　札幌市北四条西
大阪出張所　大阪市東区北浜
工　　場　静岡県焼津市

漁船用中短波無線送受信装置
漁船用中短波無線電話装置
製作工事販売保守一式

合資会社　三崎無線電機工業所

本社．営業所　三浦市三崎町仲崎187　電話（三浦）2543・3431番
工　　場　三浦市三崎町六合原660　電話（三浦）2960番
八戸出張所　青森県八戸市鮫町住吉8

装備船名
第 12 福生丸
第 32 大黒丸
第 18 光洋丸
第 12 全功丸
第 30 振興丸
其の他



第26　住吉丸

船主	住吉漁業株式会社　（三浦市）
造船所	株式会社　新潟鉄工所
主要寸法	長36.95m×幅6.80m×深3.40m
総屯数	252.71屯
魚艙容積	253.47m³
燃料油艙	127.14m³
速力	最大12.35節
主機	デーゼル 650HP（新潟鉄工）　1基
補機	デーゼル 90HP, 80HP（ヤンマー）　各1基
無線	200W, 75W（日本無線）　各1基
冷凍装置	日新興業設計施工 アンモニヤ直膨式75HP, 30HP　各1基
レーダー（東京計器）, 方探（光電）, 音測（産研）其の他各1式	
竣工	昭和33年6月30日

ゼル機関は定評ある

阪鉄工所

三（千成屋ビル）電話京橋（56）4902〜3
（北洋ビル）　電話（3）4507
八　電話北浜（23）4790
五九四　電話（焼津）2121〜5

漁船の冷凍装置に定評ある

日新興業株式会社

本社　大阪市北区中之島3の3　（朝日ビル）TEL. 北浜（23）9736—7（直通）
大代表（23）9531（朝日ビル交換台）
東京支店　東京都中央区銀座西6の3（朝日ビル）TEL. 銀座（57）6804.6810.6811
清水出張所　清水市三保本村四区　TEL. 清水（2）3507
三崎サービスステーション三浦市三崎町西野34金指造船所三崎出張所内TEL.三浦2851

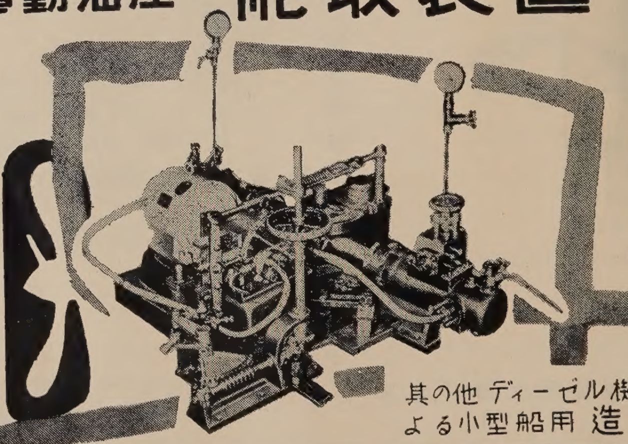
施工船名
- 第12福生丸
- 第26住吉丸
- 第32住吉丸
- 第7岩地丸
- 第1全功丸
- 多胡丸
- （其の他約五百隻）

紫綬褒章に輝やく
泉井式ラインホーラー

株式會社　泉井鉄工所
高知県室戸町

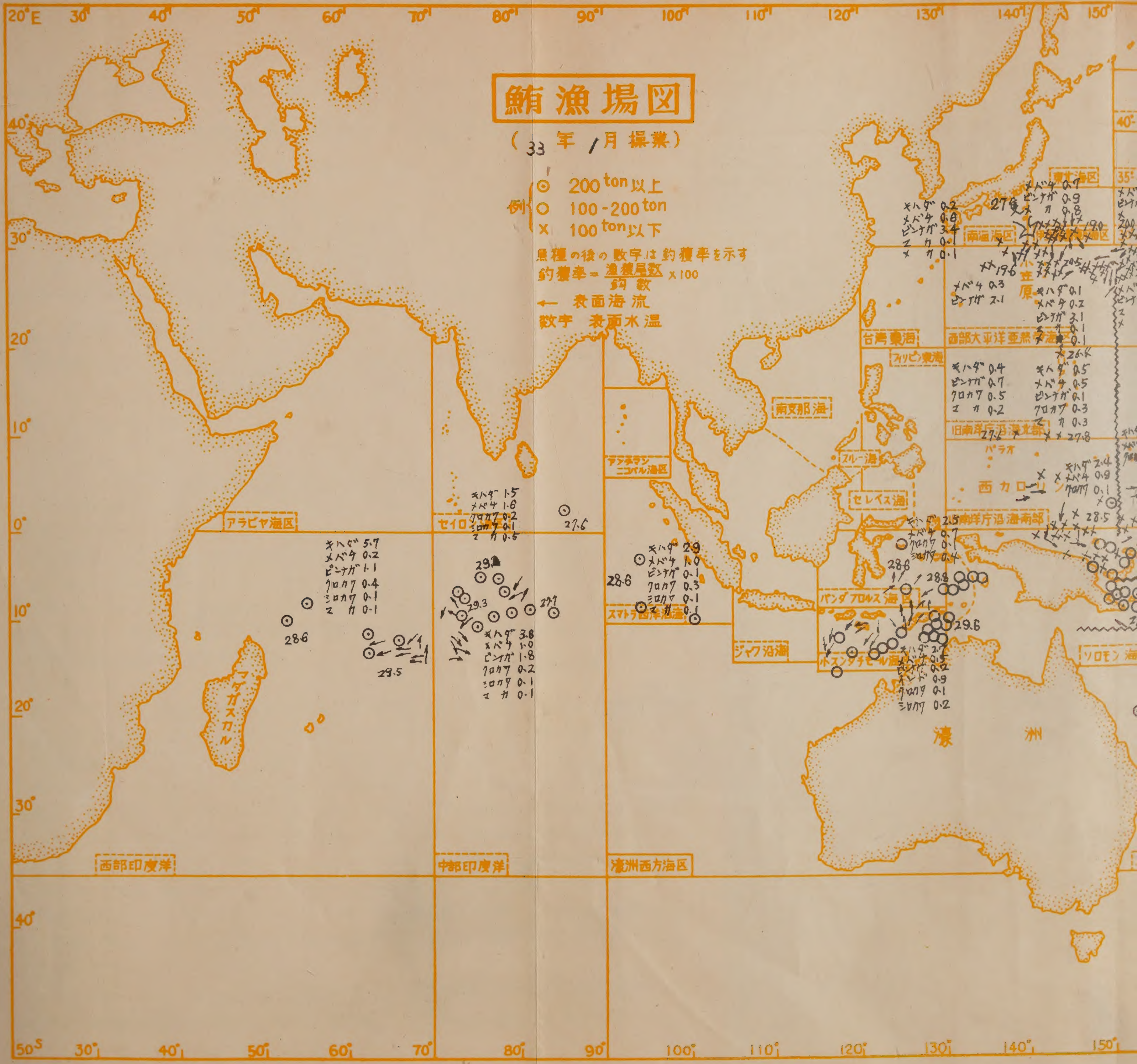
川崎ヘルショウ式
電動油圧　舵取装置

1HP～3HP



其の他 ディーゼル機関の排気利用による小型船用 造水装置

川崎重工業株式會社
神戸市生田区東川崎町二丁目一四（電）湊川(5)7531
東京支店　東京都港区芝田村町一丁目(日比谷ビル)（電）(59)6101
（本紙名記入の上御一報下さればカタログ御送附致します）



鮪漁場図

（33 年 1 月 操業）

例
- ⊙ 200 ton 以上
- ○ 100-200 ton
- × 100 ton 以下

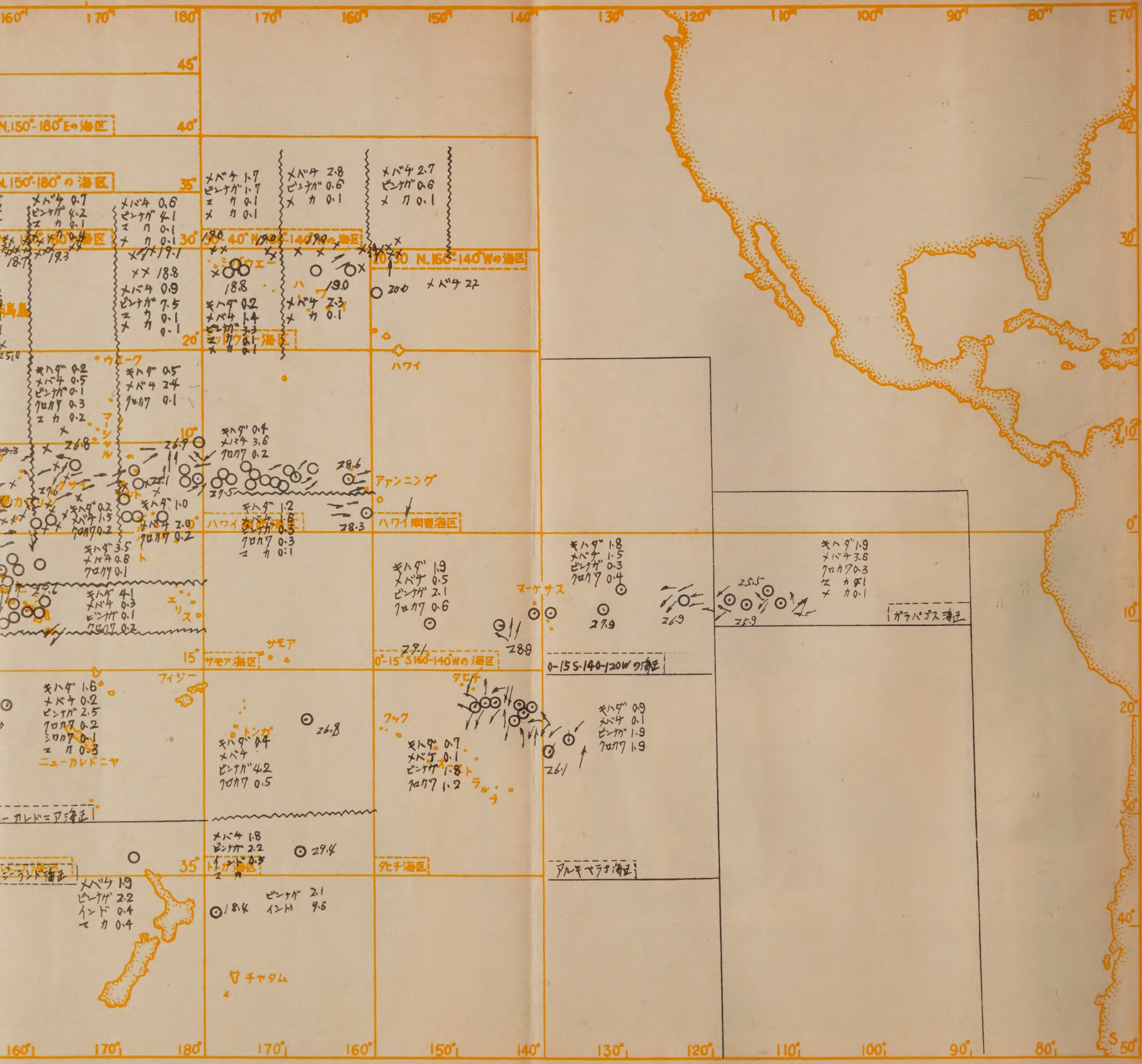
魚種の後の数字は釣獲率を示す

釣獲率＝漁獲尾数／鈎数 ×100

← 表面海流

数字 表面水温

20°E
30°
40°
50°
60°
70°
80°
90°
100°
110°
120°
130°
140°
150°
40°
30°
20°
10°
0°
10°
20°
30°
40°
50°S
35°
アラビヤ海区
セイロン海区
アンダマン ニコバル海区
スマトラ西洋海区
南支那海
台湾東海
フィリピン東海
スルー海
セレベス海
バンダ フロルス 海区
ジャワ沿海
ホスンダチモール海区
南海海区
東北海区
伊豆諸島海区
小笠原
西部大平洋亜熱帯海区
旧南洋庁沿海北部
旧南洋庁沿海南部
パラオ
西カロリン
ソロモン海
マダガスカル
濠洲
西部印度洋
中部印度洋
濠洲西方海区
キハダ 1.5
メバチ 1.6
クロカワ 0.2
シロカワ 0.1
マカ 0.5
27.6
キハダ 5.7
メバチ 0.2
ビンナガ 1.1
クロカワ 0.4
シロカワ 0.1
マカ 0.1
28.6
29.5
29.2
29.3
27.7
キハダ 3.6
メバチ 1.0
ビンナガ 1.8
クロカワ 0.2
シロカワ 0.1
マカ 0.1
28.6
キハダ 2.9
メバチ 1.0
ビンナガ 0.1
クロカワ 0.3
シロカワ 0.1
マカ 0.1
キハダ 0.2
メバチ 0.8
ビンナガ 3.4
マカ 0.1
メカ 0.1
27.6
メバチ 0.7
ビンナガ 0.9
メカ 0.8
19.0
19.6
20.5
メバチ 0.3
ビンナガ 2.1
キハダ 0.1
メバチ 0.2
ビンナガ 3.1
マカ 0.1
メカ 0.1
26.6
キハダ 0.4
ビンナガ 0.7
クロカワ 0.5
マカ 0.2
キハダ 0.5
メバチ 0.5
ビンナガ 0.1
クロカワ 0.3
マカ 0.3
27.6
27.8
キハダ 2.4
メバチ 0.9
クロカワ 0.1
28.5
キハダ 2.5
メバチ 0.7
クロカワ 0.1
シロカワ 0.4
28.6
28.8
29.6
キハダ 2.7
メバチ 0.5
ビンナガ 0.2
インド 0.9
クロカワ 0.1
シロカワ 0.2


160°
170°
180°
170°
160°
150°
140°
130°
120°
110°
100°
90°
80°
E70°
45°
40°
35°
30°
20°
10°
0°
10°
15°
20°
30°
35°
40°
50°
S
N.150°-180°Eの海区
N.150°-180°の海区
150°-180°の海区
30°-40°N.180°-140°の海区
20-30 N.160°-140°Wの海区
ミッドウェー海区
ハワイ南西海区
ハワイ南東海区
サモア海区
0°-15°S160°-140°Wの海区
0-15S.140-120Wの海区
ガラパゴス海区
ニューカレドニア海区
ニュージーランド海区
トンガ海区
タヒチ海区
アルキペラゴ海区
ミッドウェー
ハワイ
ウェーク
マーシャル
ギルバート
カロリン
アァンニング
エリス
サモア
フィジー
トンガ
ニューカレドニヤ
クック
タヒチ
マーケサス
オーストラル
チャタム
メバチ 1.7
ビンナガ 1.7
マカ 0.1
メカ 0.1
メバチ 2.8
ビンナガ 0.6
メカ 0.1
メバチ 2.7
ビンナガ 0.6
メカ 0.1
メバチ 0.7
ビンナガ 4.2
マカ 0.1
メカ 0.4
メバチ 0.6
ビンナガ 4.1
マカ 0.1
メカ 0.1
18.7
19.3
19.1
18.8
19.0
19.0
19.0
18.8
19.0
20.0
メバチ 2.7
メバチ 0.9
ビンナガ 7.5
マカ 0.1
メカ 0.1
キハダ 0.2
メバチ 1.4
ビンナガ 3.3
マカ 0.1
メカ 0.1
メバチ 2.3
メカ 0.1
25.0
キハダ 0.2
メバチ 0.5
ビンナガ 0.1
クロカワ 0.3
マカ 0.2
キハダ 0.5
メバチ 2.4
クロカワ 0.1
26.8
26.9
キハダ 0.4
メバチ 3.6
クロカワ 0.2
28.6
27.6
28.1
27.5
キハダ 0.2
メバチ 1.5
クロカワ 0.2
キハダ 1.0
メバチ 2.0
クロカワ 0.2
キハダ 1.2
メバチ 1.6
ビンナガ 0.3
クロカワ 0.3
マカ 0.1
28.3
キハダ 3.5
メバチ 0.8
クロカワ 0.1
25.6
キハダ 4.1
メバチ 0.3
ビンナガ 0.1
クロカワ 0.2
キハダ 1.9
メバチ 0.5
ビンナガ 2.1
クロカワ 0.6
29.1
28.9
キハダ 1.8
メバチ 1.5
ビンナガ 0.3
クロカワ 0.4
27.9
26.9
25.5
25.9
キハダ 1.9
メバチ 3.6
クロカワ 0.3
マカ 0.1
メカ 0.1
キハダ 1.6
メバチ 0.2
ビンナガ 2.5
クロカワ 0.2
シロカワ 0.1
マカ 0.3
26.8
キハダ 0.4
メバチ
ビンナガ 4.2
クロカワ 0.5
キハダ 0.7
メバチ 0.1
ビンナガ 1.8
クロカワ 1.2
キハダ 0.9
メバチ 0.1
ビンナガ 1.9
クロカワ 1.9
26.1
メバチ 1.8
ビンナガ 2.2
インド 0.5
マカ
29.4
メバチ 1.9
ビンナガ 2.2
インド 0.4
マカ 0.4
18.4
ビンナガ 2.1
インド 9.6

三崎他二港の水揚調査を主体とする遠洋鮪漁業の考察

（昭和33年1月現況）

三崎　鮪漁業研究会　（調査研究部）
神奈川県水産試験場　（調査部）
東京，燒津　南海区水産研究所　（遠洋資源部）

1 調査の概要

昭和33年1月分の鮪延繩調査船数は12月より激増し、三崎77，東京137，燒津94，計308隻に達した。このうち体長測定船数は119，調査海区数は29であつた。

2 漁況の概要

（キハダ）

ガラパゴス海区は12月とほぼ同率でやや好漁、0—15°S，140—120°Wの海区では不漁からやや恢復、ハワイ南西海区は5°N以北、以南とも不漁期である。0—15°S，160—140°Wの海区においては、12月より低下したが次第に上昇するであろう。タヒチ、トンガ海区はともに不漁、南洋北部も不漁で、南洋南部も同様であるが、140—150°Eでは上昇してやや好漁となつている。ソロモンは高率后期で、ニユーカレドニア海区は不漁、バンダ・フロレス海区は不漁期に向つて低減中、小スンダ・チモール海区は好漁、スマトラ西岸沿海は12月より上昇してやや好漁、セイロン海区は低率、中部および西部印度洋海区は高率期である。

（メバチ）

ガラパゴス海区は12月にひき続いて好漁、0—15°S，140—120°Wの海区は上昇期にあると思われたが、先月より急激、30—40°N，180—140°Wの海区、20—30°N，160—140°Wの海区およびミッドウエー海区では好漁、ハワイ南西海区においては5°N以北以南とも高率となつた。0—15°S，160—140°Wの海区、タヒチ海区は減少中、トンガ海区、チヤタム海区は秋季の低率から上昇して好漁、西部太平洋では各海域とも不漁である。南洋北部は170°E—180°で高率、南洋南部は150—160°Eの海域を除いておおむね12月の好漁を維持している。ニユージーランド海区は激増して高率となり、バンダ・フロレス海区は激減、小スンダ・チモール海区は依然として低率、スマトラ西岸沿海海区は11月から低減過程にある。セイロン海区は12月の近來にない高率から減少したがなお高く、中部印度洋海区は12月にほぼ等しく中程度の漁である。

（ビンナガ、インドマグロ）

ビンナガはアルキペラゴ海区でひき続いて好漁、30—40°N，180—140°Wの海区180—170°Wの海域は12月から減少したがなお好漁、ミッドウエー海区では高率となり、

0—15°S, 160—140°Wの海区では12月の急激な減少から恢復して好漁である。タヒチ海区は減少したがなおやや高く、トンガ海区は他海区に比較すれば高く好漁であるが更に上昇が見込まれる。チヤタム海区、30—35°N, 150°E—180°の海区も好漁で、南海海区、西部太平洋亞熱帯海区の中部、西部海域も盛漁期にある。ニューカレドニア海区のビンナガは、高率となり、ニュージーランドも更に高率となつた。小スンダ•チモール海区では完全な不漁期、スマトラ西岸沿海は盛漁期であるが低率である。中部印度洋海区はやや増加し、西部印度洋は8月から低減を続けている。

インドマグロは、チヤタム海区でますます活潑な漁獲があり、ニュージーランド海区北東部では、トンガ海区南部と同じく低率となつた。小スンダ•チモール海区においても低率期となつている。

（クロカワ）

ガラパゴス、0—150°S, 140°—120°Wの海区はともに増加しつつあるが低調、アルキペラゴ海区は上昇して高率である。ハワイ南西海区5°N以北は低率期、0—15°S, 160—140°Wの海区では高率期で、12月より増加したが好漁とならず、タヒチ海区は好漁である。トンガ海区は低率、南洋北部も低率であるが、130—140°Eの海域は好漁である。ニューカレドニア海区は好漁期、スマトラ西岸沿海は低率、西部印度洋海区はやや好漁である。

（その他のカジキ類）

シロカワは、バンダ•フロレス海区で高率期近く、昨年12月まで続いた低率よりやや増加しかがまだ好漁とならない。

マカジキは、ニュージーランド、セイロン両海区でやや高く、メカジキは、ミッドウエー海区、30—35°N, 150°E—180°の海区で比較的好漁、伊豆諸島南方海域で高率が得られた。

3 各海区の漁況

A. 赤道以南140°W以東の漁場

（ガラパゴス海区、0—15°S, 140—120°Wの海区、アルキペラゴ海区）

ガラパゴス海区においては4隻、0—15°S, 140—120°Wの海区では4隻、アルキペラゴ海区では2隻、計10隻を調査した。ガラパゴス海区では南西部、0—15°S, 140—120°Wの海区では中部、アルキペラゴ海区では北西部が漁場となり、水温は0.5°C前后の上昇がみられる。海流については漁場圖を參照されたい。

（キハダ）

ガラパゴス海区のキハダは12月とほぼ同様で1.86を示し、0—15°S, 140—120°Wの海区では、12月の低率から倍増して、おおむねガラパゴス海区と同率となつたが、昨年の漁況に比較すれば低調である。アルキペラゴ海区は、漸増を続けているが0.89と最も低い。ガラパゴス海区のキハダは、120—140°Wで操業した船が2.38を得ているのみで、東よりの他船は、釣獲率2.00に達せず、12月とは逆の傾向を示している。

体長組成をみると、ガラパゴス海区では、141cm以上の大型が減つて111—120cmの

ものが増加して38.2%に達した。0—15°S, 140—120°W の海区では、121—130cm および141—150cmに2モードがあらわれ、アルキペラゴ海区では151—160cmのものが51.9%と半数以上を占めている。

（メ　バ　チ）

ガラパゴス海区では12月と同率、0－15°S, 140—120°W の海区においては、12月の高率3.14から減少して1.48となつた。アルキペラゴ海区は非常な低率である。ガラパゴス海区のメバチは、漁場位置による漁獲率の差が認められず、同程度の率を示している。

ガラパゴス海区は12月に変らず大型であり、アルキペラゴ海区は181cm以上が44.7%で161cm以上の大型魚が93.3%と大部分を占めた。

（ビ　ン　ナ　ガ）

0—15°S, 140°W以東の海区は、昨年9～11月より増加しているが低率0.27, アルキペラゴ海区では、なお11月以來の率を示し、1.90と好漁が続いている。

（ク　ロ　カ　ワ）

クロカワは、各海区ともなお僅かづつ上昇中で、ガラパゴス海区は 0.30, 0—15° S 140—120°Wの海区は0.44, アルキペラゴは1.92の高率である。

体長組成は、ガラパゴス、0—15°S, 140—120°W の両海区とも小型から大型まで分散している。アルキペラゴ海区では、調査尾数少く、魚体の小さなものがみられなかつた。

B. 赤道以北180—14°Wの漁場

（30—40°N, 180—140°Wの海区、20—30°N, 160—140°Wの海区、
ミッドウエー海区、ハワイ南西海区 5°N以北、ハワイ南西海区 5°N以南）

30—40°N, 180—140°W の海区では、180—150°W の海域の30°N 線附近で東西方向に廣く14隻が操業している。20—30°N, 160—140°W の海区では、26°N, 160°W 附近で1隻、ミッドウエー海区では30°N線附近で8隻、ハワイ南西海区5°N以北では、6—10°N, 180—160°Wの範囲に15隻、5°N以南では160°W附近で1隻が調査された。

（キ　ハ　ダ）

20°N以北の漁場おけるキハダは低率、ハワイ南西海区5°N以北では、夏からの低下を更に続けて0.39と冬の不漁期に入つた。5°N以南の海域も低率期に入つているが1.24を示して5°N以北より高率で、従来の傾向を示している。

体長組成は、ミッドウエー海区では測定尾数が少いが、12月と同様に小型が多いようで、ハワイ南西海区5°N以北では、111—120cm のモードは変らず、小型のものがあらわれている。ハワイ南西海区5°N以南のキハダは、5°N以北より大型で131—140cmにモードがあつて52.3%を占めている。

（メ　バ　チ）

30—40°N, 180—140°W の海区におけるメバチは、なお上昇を続けるかと思われたが、180—170°Wの海域で1.74と倍増したほかは、170—160°Wの海域で、12月の釣獲

率で2.68から2.82と僅か増加したのみで、160—150°Wのメバチは12月の高率からかえつて減少して2.67となつた。2月には同程度の率を保つか、あるいは低減過程に入るかも知れない。20—30°N, 160—140°Wの海区では好漁期と思われるが、釣獲率2.21で31年同期の高率は得られない。ミッドウエー海区は高率期にあつて1.69を示し、31年、29年と同傾向である。ハワイ南西海区5°N以北も同様に高率となり、3.64でこの漁場では最高率である。この好漁はしばらく続くであろう。ハワイ南西海区5°N以南でも釣獲率の増加がみられ、12月0.33から1.58と上昇している。

30—40°N, 180—140°Wの海区においては、121—130°cmのモードは変らないが、91—100cmの山が消えて、11月と同様の組成になつた。ミッドウエー海区のメバチは91—100cmに27.3%, 121—130cmに20.7%と比較的小型である。ハワイ南西海区5°N以北の海域では、111—140cmの体長範囲に63.7%が分布し、5°N以南では、121—130cmに33.8%があらわれて、従来とおおむね同様である。

(ビンナガ)

30—40°N, 180—140°Wの海区のビンナガは、180—170°Wの海域で低減過程に入り1.75と減少した。東部海域は0.6前后で低率、ミッドウエー海区では12月に北西部で僅かあらわれたビンナガが増加して、1月は特に北西部に多く、3.34の高率を示した。

30—40°N, 180—140°Wの海区の体長組成は従来と変化ない。ミッドウエー海区はモードが81—90cmにあつて北部海区よりやや小型である。

(クロカワ、マカジキ)

ハワイ南西海区5°N以北のクロカワは不漁期で0.15, 5°N以南も低下しているが0.31と5°N以北よりやや高い。

マカジキは、北部諸海区で不漁が続いている。

ハワイ南西海区のクロカワの体長組成は従来とおおむね同形である。

C. 赤道以南の180—140°Wの漁場

(0—15°S, 160—140°Wの海区、タヒチ海区、トンガ海区、チヤタム海区)

0—15°S, 160—140°Wの海区では、マーケサス諸島西方の2隻と9°S, 155°N附近の1隻、計3隻を調査、タヒチ海区では、北東部に集中した7隻、トンガ海区は北部と南部で各1隻、チヤタム海区では、12月と同様の漁場で1隻を調査した。

海流については漁場圖を参照されたい。

(キハダ)

0—15°S, 160—140°Wの海区におけるキハダは、12月に増加したが、1月は再び減少、海区東部のマーケサス諸島西方海域は2.16, 西部は1.21と低い。2月頃から増加過程に入るであろう。タヒチ海区においては、9月以來低減過程にあつて、1月は0.65となつたが、今后上昇するかも知れない。トンガ海区は好漁期前と思われたが、1月は海区平均0.20の低率で、30°N以北は0.40, 以南は0.04と漁況に差が認められる。2月からは増加に転じよう。

体長組成は、タヒチ海区では12月と同様で大型のものが多い。

(メバチ)

0—15°S, 160—140°Wの海区では、11月から次第に低下して0.54となり、東部海域は0.66, 西部海域は0.21を示して、東部海域はこの海区としては好漁である。タヒチ海区のメバチも9月から漸減して0.09の低率で、トンガ海区においては、30°S以南で1.81の高率が得られているが、チヤタム海区北部では0.03の低率である。

0—15°S, 160—140°Wの海区では、小型のものが減少して、組成の山は141—150cmにあつて31.2%, 130cm以下のものはほとんどなく型が大きい。タヒチ海区、トンガ海区は、ともに131—140cm, 151—160cmに山があつて同様の組成を示しているが、タヒチ海区に小型のものが多くみられる。

(ビンナガ)

ビンナガは0—15°S, 160—140°Wの海区において、12月の異常な低率0.46から恢復して2.07となり、11月の好漁から低下中であると思われる。海区西部は1.47であるが東部は2.28と高い。タヒチ海区は12月2.83から1月は1.75と減少した。トンガ海区においては、3.06と増加している。トンガ海区北部では4.18, 南部では2.19と海区の南北で漁況に顕著な差がみられる。チヤタム海区では、昨年秋季から増加して、12月は釣獲率2.43に達したが、1月は2.10となつた。

体長組成調査は、タヒチ海区についてのみ実施するにとどまり、同海区においては91—100cmに61.8%のモードがみられて、10月と同様である。

(インド マグロ)

トンガ海区においては、僅かながら0.26の漁獲があり、30°S以南の海域では0.45とやや高い。チヤタム海区では、10月以來の高率がさらに増加して、9.57と非常な好況である。

トンガ海区のインドマグロは、131—170cmの範囲にほぼ同様に分布し、12月のチヤタム海区に比較して小型のものがみられない。

(クロカワ)

クロカワは、0—15°S, 160—140°Wの海区で高率期になつているが、12月0.21から0.50と僅か上昇をみたのみで、昨年までの好漁が得られない。タヒチ海区も高率期であるが、昨年までの高率が得られぬまま高率期を過ぎるようで、トンガ海区は昨年と同様の不漁である。

0—15°S, 160—140°Wの海区におけるクロカワの体長組成は、161—170cmにモードがうつつて、181—190cmに第2モードがあり、やや大型となつた。また、タヒチ海区は12月と変化ない。

D. 北部太平洋漁場

(30—35N, 150°E—180の海区、
伊豆諸島東方海区、南海海区、西部太平洋亜熱帯海区)

この漁場における調査隻数は、1月に入つて12月より更に増加して、総計91隻となつた。30—35°N, 150°E—180°の海区では、30—33°Nの範囲で西寄りの海域に多く29

隻が操業し、伊豆諸島東方海区では中部から南西部にかけて27隻、南海海区では南東部で4隻、西部太平洋亜熱帯海区においては、30°N線よりで31隻、その27隻は140—160°Eの海域で操業している。

30°N線附近の漁場では、さらに0.5—1.0°C程度の表面水溫の低下がみられる。

海流は、漁場圖を參照されたい。

（キハダ）

30°N線以北の海区は低率で、わずかに南海海区が0.20の率を示すにとどまり、西部太平洋においては各海域とも不漁である。

南海海区の体長組成は、121—130cmにモードがみられ、西部太平洋130—150°Eの海域では、91—100cmに山があつて26.8%，90cm以下のものはみられなかつた。

（メバチ）

30—35°N, 150°E—180°の海区では、11月から減少が続いて、1月は各海域0.5程度の率となり低率、伊豆諸島東方海区では、0.67でこの海区としては好漁、南海海区は0.60とほぼ同率、西部太平洋亜熱帯海区においては、140—150°Eの海域が0.18で最も低く、170E—180°の海域は0.87と比較的好漁である。

体長組成は、30—35°N, 150°E—180°の海区では、91—100cmのものが増加して24.0%に達しているほかは12月に変らず、西部太平洋においては、5～10〆の小型魚が増加しているが、他は12月と同様、伊豆諸島東方海区と南海海区とは同形で、91—100cmのものが約50%を占め、111—120cmに第2モードがある。

（ビンナガ）

30—35°N, 150°E—180°の海区は好漁期、12月に5.18の高率を示した170°E—180°の海域は、4,09とやや減じ、160—170°Eの海域は4.16に上昇し、さらに、150—160°Eの海域では、12月1.65から1月3.19と大巾に増加をみて、主群は西部海域に移つている。伊豆諸島のビンナガは、0.89でこの海区としてはまだ低率、これは海区中部の操業船が多かつた爲であろうと思われ、2月には釣獲率の上昇が見込まれる。南海海区では、南部の調査海域で3.42が得られ、西部太平洋亜熱帯海区170°E—180°は7.52と最も高く、150—160°Eの漁域では、急激に増加して3.94を示し、140—150°Eでも、12月2.07から1月は3.09に増加した。130—140°Eでは2.15と最も低い。

30—35°N, 150°E—180°の海区および西部太平洋亜熱帯海区におけるビンナガの体長組成は、12月に変らず、伊豆諸島東方海区は、従來と同様に小型で、南海海区では大型のものが多く、101—110cmにモードがみられる。

（クロカワ、メカジキ）

西部太平洋亜熱帯海区のクロカワは不漁期で低率。メカジキは、30—35°N, 150°E—180°の海区中部から西部、特に160—170°Eの海域で0.42，伊豆諸島東方海区では0.80の好漁が得られた。南海海区、西部太平洋亜熱帯海区は低率である。

メカジキの体長組成は4海区とも同様で、モードは131—140cmにある。

E. 旧南洋庁沿海漁場

（旧南洋庁沿海北部、旧南洋庁沿海南部）

南洋北部では、10°N, 180°で1隻、マーシャル西方で2隻、マリアナ南方で3隻、計6隻が調査され、南洋南部では、170°E以東で13隻、以西の140—170°Eで45隻、計58隻を調査した。南洋南部海域における操業船の増加がいちじるしい。

（キ　ハ　ダ）

南洋北部は低率期で、140—150°Eの海域および170°E以東でそれぞれ0.54, 0.53, 南洋南部の諸海域は、表1にみるように、北部より高率であるが、140—150°Eの海域が2.72とやや好漁を示して好漁期に入つたようで、南部海域では東方による程低率となつている。南洋北部1月の体長組成は、121—130cmにモーガがみられ、小中型が多く・南部では、各海域を通じて111—120cmにモードがみられ、12月に比較して大きな変化はみられない。

表 1. 舊南洋廳沿海南部におけるキハダの漁況 (33.1)

	140—150°E	150—160°E	160—170°E	170°E—180°
5°N以北	0.35	0.62	0.32	0.84
5°N以南	2.72	2.08	1.76	1.58

（メ　バ　チ）

南洋北部170°E以西は好漁期前で低く、170°E以東の10°N線附近の1隻は、2.40の好漁である。南部におけるメバチは特に5°N以北の諸海域で好漁が続いているが、140—160°Eでは既に低下し始めて居り、東方海域程高率となつている。　（表2）

表 2. 舊南洋廳沿海南部におけるメバチの漁況 (33.1)

	140—150°E	150—160°E	160—170°E	170°E—180°
5°N以北	0.91	1.18	2.08	2.10
5°N以南	0.92	0.90	0.99	1.68

南洋北部140—150°Eおよび南洋南部のメバチは、ともに111—120cmにモードを持ち、9月以來、同様の組成が続いている。

（ク　ロ　カ　ワ）

南洋北部の130—140°Eの海域で0.51とやや好漁があつたほかは、北部南部とも不漁期で低率である。(表3)

体長組成は從來に変らず、昨年に同じく北部は南部よりやや小さい。

表 3. 舊南洋廳沿海南部におけるクロカワの漁況 (33.1)

	140—150°E	150—160°E	160—170°E	170°E—180°
5°N以北	0.06	0.22	0.11	0.16
5°N以南	0.08	0.15	0.14	0.16

F. ソロモン以南漁場

（ソロモン海区、ニユーカレドニア海区、ニユージーランド海区）

ソロモン海区においては、10—15°Sの海域の調査船はなく、0—10°Sのソロモン群島周辺からニユーギニア東海岸に至る海域で、44隻を調査している。ニユーカレドニア海区では、珊瑚海中央部および西部でそれぞれ1隻、1月に入つて調査船は激減した。また。ニユージーランド海区では、ノース岬北西方で1隻を調査するにとどまつた。海流については、漁場圖を參照されたい。

（キ　ハ　ダ）

ソロモン海区のキハダは、最盛期を過ぎて低下し始めたが、0—5°Sの海域では3.46 5—10°Sでは4.11となお好漁を示し、ニューギニアよりに高率となつていることは從來と同様である。ニューカレドニア海区の2隻は、12月から再び減少して1.57を示し、この海区としては低率である。

表 4. ソロモン海区におけるキハダの漁況　(33.1)

	155°E 以西	155°E 以東
0—5°S	3.72	2.63
5—10°S	6.68	3.58

ソロモン海区におけるキハダは、やや大型のものが増加している。

（メ　バ　チ）

ソロモン海区のメバチは周年低率ながら、0—10°Sの中部から西部海域で北よりに高く、また0—5°Sの海域では東側が高率で、12月と同様の傾向であり、ニューカレドニア海区は冬季の低率、ニュージーランド海区においては、夏季以來の低率から急激に上昇し、31年12月に比してやや南東方の漁場で、1.89の釣獲率が得られ、31年12月とほぼ同率である。

ソロモン海区におけるメバチの体長組成は、12月と比較して大きな変化はない。

表 5. ソロモン海区におけるメバチの漁況　(33.1)

	155°E 以西	155°E 以東
0—5°S	0.46	0.64
5—10°S	0.34	0.36

（ビ　ン　ナ　ガ）

ソロモン海区北部のビンナガは、0—5°S, 5—10°Sともまだ完全な低率期にあり、ニューカレドニア海区では、昨年11月から増加が続いて、1月は2.50に達した。この率は、2, 3月に入つて多少減じても、極端な不漁とはならず、夏季の高率に向うであろう。ニュージーランド海区においては、ビンナガの増加が続いて、2.23とこの海区としては始めての高率が得られた。今后の変化が注目される。

ソロモン海区0—5°Sの海域におけるビンナガの体長組成は12月と同様である。

（インド　マグロ）

ニュージーランド海区のインドマグロは、12月から激減して、ノース岬北西方漁場で0.43の低率となつた。

（クロカワおよびその他のカジキ類）

ソロモン海区のソロモン群島からニューギニア東岸に至る海域のクロカワは不漁、0—5°Sは0.13, 5—10°Sは0.16に過ぎない。ニューカレドニア海区のクロカワは上昇期であるが、0.23の率でやや低い。

シロカワは、ニューカレドニア海区で不漁期となつて0.08の低率、同海区のマカジキは、12月の高率0.67から0.29と半減、ニュージーランド海区のマカジキは、0.41と好漁を示している。

ソロモン海区0—10°S, 1月のクロカワは小型で、141—150cmのものが多く、20.8%に達している。ニューカレドニア海区は12月と同様の組成である。

G. 東部印度洋漁場

（バンダ•フロレス海区、小スンダ•チモール海区、スマトラ西岸沿海海区）

バンダ•フロレス海区では、ニューギニア西岸からセラム島南方の海域で6隻、セレベス島東岸バンカルシアン岬沖のモルッカ海で1隻、フロレス海北方のツカンベシ諸島附近で1隻、計8隻を調査、小スンダ•チモール海区においては、チモール島周辺で9隻、小スンダ列島南部で7隻、計16隻、さらにスマトラ西岸沿海では、中部で1隻、南部で2隻、計3隻が調査されている。海流については漁場圖を參照されたい。

（キハダ）

バンダ•フロレス海区のキハダは、11月の高率から低減過程にあり、1月は2.45を示している。この釣獲率は、2月に入つてさらに減少しても、3, 4月には増加に転ずるであろう。セラム島附近の6隻は2.29, モルッカ海の2隻は3.48でやや高くなつている。小スンダ•チモール海区においては、キハダは好漁期にあつて2.72, 海区平均釣獲率は12月とほとんど同率であるが、チモール島附近は3.59, 小スンダ列島南方は1.32と低く、12月と同傾向である。スマトラ西岸沿海においては、やや恢復して11月と同様、南部の2隻は2.63を示して、中部の1隻は3.33の好漁であつた。

体長組成は、小スンダ•チモール海区、スマトラ西岸沿海海区とも、121—130cmにモードが見られて30%以上を占め、小スンダ•チモール海区は12月より僅か大型、スマトラ西岸沿海は12月と同様である。

（メバチ）

バンダ•フロレス海区におけるメバチは、セラム島附近で0.65, モルッカ海では1.24の釣獲率を示し、海区の平均釣獲率は0.72で低率となつている。小スンダ•チモール海区も低率、チモール島附近0.47, 小スンダ列島沖0.43である。スマトラ西岸沿海は低減過程にあり、1.05を示して好漁末期にある。

体長組成は、バンダ•フロレス海区および小スンダ•チモール海区においては12月と変らず、スマトラ西岸沿海では、111—120cmにモード（山）があらわれ、從來とことなつて型が小さくなつた。

（ビンナガ）

小スンダ•チモール海区のビンナガは、なお上昇過程に入らず不漁期にあり、0.16の低率であるが、小スンダ列島南方では、0.46とやや高く、初春には増加が期待される。スマトラ西岸沿海海区では、12月の1.00から0.13と減少している。当分の間は、低率が続くであろう。

スマトラ西岸沿海のビンナガの体長組成は、ソロモンと同様に91—100cmにモード（山）がある。

（インドマグロ）

小スンダ•チモール海区の小スンダ列島南方海域のインドマグロは、12月から不漁期となり1.15を示したが、1月は2.29とやや恢復した。海区平均釣獲率は0.91で低率である。

体長組成は、12月と同様である。

（クロカワおよびその他のカジキ類）

クロカワは各海区とも低率、シロカワは、バンダ・フロレス海区で0.37, セラム島南方の6隻は0.41であつた。マカジキ、メカジキは各海区とも低率である。

小スンダ・チモールおよびスマトラ西岸沿海におけるクロカワの体長組成は、従來と変化ない。

H. 中、西部印度洋漁場

（セイロン海区、中部印度洋海区、西部印度洋海区）

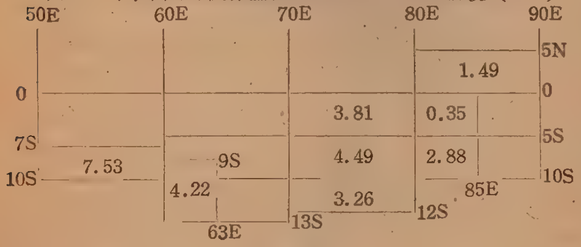
この漁場における1月の調査船は17隻で、セイロン海区では、12月に続いて南東部で1隻、中部印度洋海区では、北部で11隻、さらに西部印度洋海区においては、セイシエル諸島南方で2隻、その東方で3隻、計5隻を調査した。体長組成調査は、セイロン海区、西部印度洋海区については実施できなかつた。

海流については漁場圖参照のこと。

（キハダ）

セイロン海区のキハダは、12月の低率1.97からさらに1.49と低下して不漁であるが晩冬から次第に好漁となるであろう。

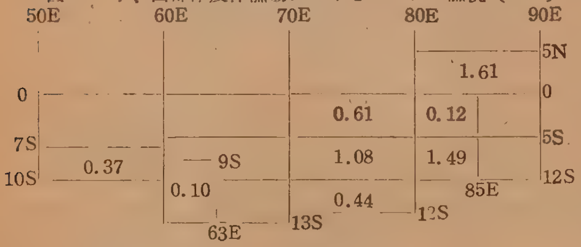
図 1. 中、西部印度洋漁場におけるキハダの漁況 (33.1)


50E
60E
70E
80E
90E
5N
0
7S
10S
5S
10S
1.49
3.81
0.35
4.49
2.88
7.53
9S
4.22
3.26
85E
12S
13S
63E

中部印度洋海区では3.64と増加し、12月と同じく西よりに高率で、西部印度洋海区は冬季の高率となり、海区平均5.66, セイシエル諸島附近では7.53とこの漁場中最も高い。　（圖１）

中部印度洋海区におけるキハダは、やや大型となつている。

図 2. 中、西部印度洋漁場におけるメバチの漁況 (33.1)


50E
60E
70E
80E
90E
5N
0
7S
10S
5S
12S
1.61
0.61
0.12
1.08
1.49
0.37
9S
0.10
0.44
85E
12S
13S
63E

（メバチ）

セイロン海区のメバチは、12月の高率2.18が同海域で1.61と低下した。中部印度洋海区でもやや低率となつて1.04を示し、西部印度洋海区も0.21で低率期にある。釣獲率は東よりに高率で12月と同傾向である。　（圖２）

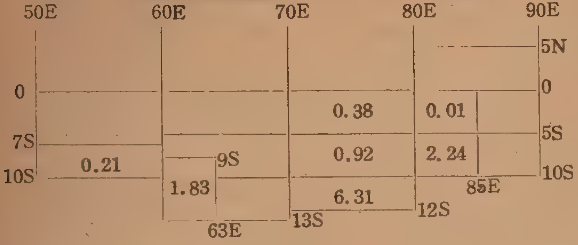
中部印度洋海区におけるメバチの体長組成は、12月と同様である。

（ビンナガ）

セイロン海区は不漁期、中部印度洋海区は1.76と上昇、西部印度洋海区では、昨年8, 9月のいちじるしい好漁から減少が続いて、1.13となつた。今后は次第に増加が見込まれている。ビンナガの釣獲率もおおむね東よりに高率の傾向にある

中部印度洋海区のビンナガは91—100 cm のものが増加している。

図 3. 中、西部印度洋漁場におけるビンナガの漁況 (33.1)

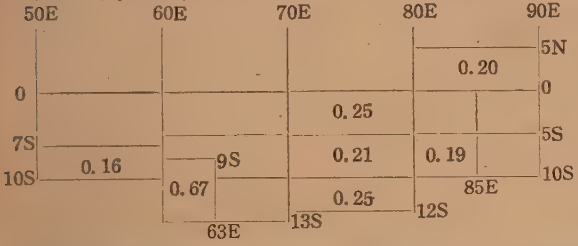

50E
60E
70E
80E
90E
5N
0
0
7S
10S
0.38
0.01
5S
0.21
9S
0.92
2.24
10S
1.83
85E
6.31
13S
12S
63E

（クロカワおよびマカジキ）

セイロン海区および中部印度洋海区では、ともに12月よりやや低下して0.20, 0.19を示し、西部印度洋海区は0.45その東方海域は0.67で印度洋漁場では最も高率であつた。

マカジキは、セイロン海区において増加がみられ、0.48を示しているが、中部および西部印度洋海区は減少して低率である

図 4. 中、西部印度洋漁場におけるクロカワの漁況 (33.1)


50E
60E
70E
80E
90E
5N
0.20
0
0
0.25
7S
5S
10S
0.16
9S
0.21
0.19
10S
0.67
85E
0.25
13S
12S
63E

中部印度洋海区のクロカワの体長組成は、東部漁場とおおむね同様で12月と同形である。

4/20スミ

Fishing area — vessels — water temp — total baskets

月別、漁場別、鮪類漁獲調査表

1 漁場	2 操業区域	3 調査隻数	4 水温 (C°)	5 流向 流速	6 操業回数	7 漁具数	8 鈎数	9	10 ま	
									きはだ 11	めばち 12
29 ガラパゴス	6— 9S 120—109W	4	24.6 26.2	NE—NW 0.2—0.6 W	97	39,272	190,760	尾数 %	3546 1.86	6836 3.58
0— 15S 140—120W	4— 12S 143—120W	4	25.8 9.6	W SW 0.2—0.4	80	31,895	141,161		2479 1.76	2087 1.48
アルキペラゴ 60	18— 24S 143—134W	2	25.2 27.3	W, SW, E NE WSW 0.2—1.0	56	21,315	92,730		828 0.89	75 0.08
30— 40N 180—140W	30— 33N 180—154W	14	17.3 20.8	ENE SW/W NE/E	256	88,241	393,512		55 0.01	10499 2.67
20— 30N 160—140W	25— 30N 160—158W	1	19.4 22.5	—	14	—	23,170		7 0.03	512 2.21
ミッドウエー 31	28— 31N 180—159W	8	17.6 20.1	—	151	45,718	210,795		235 0.11	3570 1.69
ハワイ南西 (5°N 以北) 32	6— 11N 180—160W	15	26.4 29.2	—	287	100,784	419,977		1646 0.39	15305 3.64
ハワイ南西 (5°N 以南) 30	3— 5N 164—153W	1	27.3 9.3	W 0.6—1.3	28	11,352	52,680		652 1.24	830 1.58
0— 15S 160—140W	7— 12S 158—140W	3	28.4 9.3	N 0.5 ESE 0.3—0.8	37	14,823	69,884		1340 1.92	378 0.54
33 タヒチ	15— 23S 151—138W	7	26.0 28.9	NW 0.3—0.5 S, SE, W, N-W, E 0.1—0.4	160	64,496	287,045		1879 0.65	264 0.09
61 トンガ	18— 34S 172—166W	2	17.6 27.4	—	34	11,510	57,550		113 0.20	593 1.03
34 チヤタム	37— 38S 180—179W	1	18.1 7	—	7	2,352	10,674			3 0.03
30— 35N 150E—180	29— 35N 149—175E	29	17.5 21.5	—	478	124,134	660,422		81 0.01	3225 0.49
62 伊豆東方	29— 35N 139—151E	27	17.5 21.5	SW, SSW, SE-SSE NNE 1.0-30 S 1.5	367	61,468	354,147		42 0.01	2370 0.67

(昭和33年1月操業分)

bluefin

SJ　other　shark　total

（別表１） A

ぐ	ろ		16 か	じ	き			22 かつお	23 雑	24 さめ	25 計	26 記事
13 びんなが	14 くろ鮪	15 いんど鮪	17 くろかわ	18 しろかわ	19 まかじき	20 めかじき	21 ばしょう					
9			569 0.30	40 0.02	87 0.05	103 0.05	16 0.01	178 0.09	208 0.11	144 0.08	11736 6.15	27 体長測定尾数 3
376 0.27			624 0.44	18 0.01	56 0.04	12 0.01	18 0.01	332 0.24	104 0.07	287 0.20	6393 4.53	1
1764 1.90			1789 1.92	13 0.01	18 0.02	11 0.01	1		63 0.07		4562 4.92	1
2486 0.63	38 0.01		5		147 0.04	304 0.08		67 0.02	1073 0.27	293 0.07	14967 3.80	4
3 0.01					6 0.03	4 0.02			8 0.03	11 0.05	551 2.38	0
4955 2.35	8		7		105 0.05	201 0.10		42 0.02	638 0.30	318 0.15	10079 4.78	3
29 0.01			644 0.15	64 0.02	174 0.04	54 0.01	73 0.02	1	149 0.04	15	18154 4.32	8
140 0.27			162 0.31	5 0.01	27 0.05	9 0.02					1825 3.46	1
1450 2.07			348 0.50	10 0.01	10 0.01	12 0.02	19 0.03		277 0.39	186 0.27	4030 5.77	1
5035 1.75	1		3345 1.17	47 0.02	48 0.02	20 0.01	45 0.02		612 0.21	425 0.15	11721 4.08	4
1762 3.06		147 0.26	124 0.22	3 0.01	140 0.24	15 0.03			30 0.05		2927 5.09	1
224 2.10		1022 9.57							1 0.01		1250 11.7	0
23098 3.49	9		47 0.01	3	237 0.04	2524 0.38	10	3	160 0.02	1873 0.28	31270 4.73	6
3163 0.89			3		52 0.01	2838 0.80		4	12	6819 1.93	15303 4.32	14

1 漁場	2 操業区域	3 調査隻数	4 水温 (C°)	5 流向 流速	6 操業回数	7 漁具数	8 鈎数	0 尾数 % 10 きはだ 11	ま めばち 12
55 南海	30— 34N 136—140E	4	18.5 20.0	NNE 0.4	47	7,411	52,339	105 0.20	313 0.60
35 西部太平洋	20— 31N 134—177E	31	18.0 25.8	W 0.5 S/E 1.0 W, WSW E/N, NE/N	446	95,697	579,375	218 0.04	1429 0.25
63 南洋北部 (170°E以東)	10— 11N 179E—180	1	26.8 7.0	—	19	6,555	32,775	175 0.53	785 2.40
64 南洋北部 (170°E以西)	10— 15N 138—166E	5	26.6 28.2	—	30	9,183	47,392	209 0.44	217 0.46
3 南洋南部 (170°E以東)	0— 10N 167E—180	13	26.9 29.3	E/N 0.8 E 0.6 NE 0.5 ENE 〃	241	85,657	399,156	4008 1.00	8019 2.01
30 南洋南部 (170°E以西)	1S— 10N 139—170E	45	26.8 29.7	—	592	189,946	878,413	13375 1.52	10590 1.21
38 ソロモン	1N— 11S 143—170E	44	27.0 31.5	—	678	253,017	1,187,132	44704 3.77	4442 0.37
34 ニューカレドニア	14— 24S 150—159E	2	24.8 27.1	SSW 0.2—0.7	25	9,700	42,600	669 1.57	97 0.23
46 ニュージーランド	32— 34S 166—173E	1	16.7 20.6	—	20	6,982	33,085	9 0.03	624 1.89
52 バンダフロレス	0— 7S 123—135E	8	28.0 29.7	NE 1.0	63	22,994	109,838	2687 2.45	796 0.72
56 小スンダチモール	7— 17S 116—131E	16	28.5 30.9	ENE 0.5-1.0 S-W 0.5-1.0	278	104,619	468,177	12728 2.72	2232 0.48
53 スマトラ西岸	3N— 10S 90—105E	3	27.8 9.6	—	63	25,490	125,450	3700 2.95	1311 1.05
54 セイロン	1— 5N 79— 92E	1	27.1 28.0	—	9	3,680	14,720	219 1.49	237 1.61
59 中部印度洋	2— 12S 69— 86E	11	27.2 30.2	W/N W 0.2-1.0 W/S 0.4-0.8 ESE 0.4-0.6	213		412,192	14984 3.64	4292 1.04
65 西部印度洋	7— 13S 50— 69E	5	27.6 31.0	WSW ESE	106		212,330	12023 5.66	455 0.21
44 合計	29	308			4882		7,559,481	122716 1.62	82386 1.09

（別 表 1） B

ぐ	13 7		16 か じ き					かつお 22	雑 23	さめ 24	計 25	記　事 26
びんなが 13	くろ鮪 14	いんど鮪 15	くろかわ 17	しろかわ 18	まかじき 19	めかじき 20	ばしょう 21					
1791 3.42	2				24 0.05	29 0.06		2	10 0.02	231 0.44	2507 4.79	28 体長測定隻数 3
20668 3.57	5		29 0.01	7	571 0.10	563 0.10	22	38 0.01	227 0.04	933 0.16	24710 4.26	14
9 0.03			38 0.12		8 0.02	1					1016 3.10	0
60 0.13			141 0.30		140 0.30	4 0.01			232 0.49	118 0.25	1121 2.37	2
83 0.02			644 0.16	38 0.01	53 0.01	39 0.01	37 0.01	5	598 0.15	83 0.02	13607 3.41	5
104 0.01			1312 0.15	106 0.01	247 0.03	53 0.01	313 0.04	26	584 0.07	2085 0.24	28795 3.28	15
876 0.07			1879 0.16	282 0.02	48	93 0.01	4430 0.37		351 0.03	1429 0.12	58534 4.93	13
1065 2.50			96 0.23	32 0.08	124 0.29	17 0.04	2		26 0.06	93 0.22	2221 5.21	2
737 2.23		143 0.43	4 0.01	1	135 0.41	15 0.05			29 0.09		1697 5.13	0
			101 0.09	411 0.37	41 0.04	9 0.01	78 0.07	10 0.01	5		4138 3.77	1
		4261 0.91	408 0.09	776 0.17	273 0.06	102 0.02	247 0.05	21	148 0.03	122 0.03	22070 4.71	11
752 0.16		10 0.01	331 0.26	157 0.13	71 0.06	32 0.03	48 0.04		1	21 0.02	5841 4.66	1
159 0.13			29 0.20	7 0.05	71 0.48	2 0.01					565 3.84	0
7251 1.76			801 0.19	351 0.09	395 0.10	103 0.02	128 0.03		443 0.11	709 0.17	24457 5.93	5
2394 1.13			956 0.45	200 0.09	121 0.06	61 0.03	130 0.06	518 0.24	40 0.02	549 0.26	17447 8.22	0
75443 1.00	63	5583 0.06	14436 0.19	2571 0.03	3429 0.05	7230 0.10	5617 0.07	1247 0.02	6029 0.08	16744 0.22	343494 4.54	119

月別、漁場別、鮪類体長組成表（昭和33年1月操業分）

（別表2）

45 3 1 2 6 47 47 48

魚種	測定船数	漁場	操業位置	操業回数	9	50 cm以上	51—60	61—70	71—80	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171 cm以上	25 計	漁獲尾数
11 き	3	24 ガラパコス	6—9S 120—114W	73	尾数 %						2 0.3	27 3.5	291 38.2	133 17.5	50 6.6	128 16.8	103 13.5	27 3.5		761 100	2423
	1	0—15S 140—120W	6—12S 143—138W	25								2 0.6	18 5.7	99 31.3	59 18.7	85 26.9	48 15.2	5 1.6		316 100	977
	1	アルキ 60 ペラゴ	18—24S 140—134W	36											3 5.8	11 21.2	27 51.9	11 21.2		52 100	597
	1	ミッド 31 ウエー	28—31N 180—175W	22								2 28.6	4 57.1			1 14.3				7 100	192
	7	32 ハワイ南西 （5°N以北）	6—10N 180—163W	141						9 2.4	13 3.4	24 6.3	130 34.2	101 26.6	73 19.2	20 5.3	7 1.8		3 0.8	380 100	848
	1	36 ハワイ南西 （5°N以南）	3—5N 164—153W	28									17 8.7	32 16.4	102 52.3	42 21.5	2 1.0			195 100	652
	1	0—15S 160—140W	7—12S 146—143W	19										3 1.5	40 20.3	112 56.9	39 19.8	3 1.5		197 100	677
	4	33 タヒチ	15—23S 151—138W	118								1 0.1		11 1.7	166 26.3	221 35.0	178 28.2	51 8.1	3 0.5	631 100	1455
は	5	30—35N 150E—180	29—34N 149—175E	92									4 25.0	6 37.5	2 12.5	1 6.3	3 18.8			16 100	19
だ	3	64 伊豆東方	30—35N 139—144E	31							1 8.3	2 16.7	2 16.7	5 41.7		2 16.7				12 100	15
	3	55 南海	30—34N 138—140E	37							6 10.2	6 10.2	14 23.7	25 42.4	1 1.7	5 8.5	2 3.4			59 100	60
	9	35 西部太平洋	20—30N 134—152E	126							37 26.8	34 24.6	31 22.5	27 19.6	5 3.6	4 2.9				138 100	153
	2	63 南洋北部	10—13N 140—145E	22							7 6.8	20 19.4	26 25.2	40 38.8	8 7.8	1 1.0	1 1.0			103 100	189
	14	36 南洋南部	0—10N 150—178E	250				8 0.4	10 0.5	51 2.4	107 4.9	247 11.4	822 37.9	502 23.1	328 15.1	86 4.0	6 0.3	1	1	2169 100	4581
	11	35 ソロモン	1N—12S 143—170E	185						10 0.3	161 5.2	715 23.3	822 26.8	849 27.6	367 12.0	127 4.1	19 0.6	1		3071 100	12147

	9	56 小スンダ チモール	8—14S 115—131E	171					2 0.1	10 0.4	23 0.9	46 1.8	449 17.6	899 35.3	501 19.7	475 18.6	138 5.4	5 0.2		2547 100	8468
	1	55 スマトラ	3N—7S 91—99E	28							2 0.4	15 3.3	146 32.0	152 33.3	63 13.8	55 12.1	20 4.4	3 0.7		456 100	1899
	5	54 中部印度洋	2—10S 69—86E	118								15 1.1	154 10.9	338 24.0	243 17.3	489 34.8	152 10.8	14 1.0	2 0.1	1407 100	7347

25 魚種	7 測定船数	1 漁場	2 操業位置	6 操業回数	4	60 cm 以下 46	61—70	71—80	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181 cm 以上 47	計 25	漁獲尾数
	2	24 ガラパゴス	7—9S 120—109W	48	尾数 %					3 0.5	7 1.3	4 0.7	20 3.6	38 6.9	76 13.8	101 18.3	149 27.0	97 17.6	57 10.3	552 100	2672
	1	60 アルキペラゴ	18—24S 140—134W	36									1 1.0	3 2.9	1 1.0	2 1.9	25 24.3	25 24.3	46 44.7	103 100	48 (115)
12	4	30—40N 180—140W	30—32N 178—154W	73					17 2.0	71 8.4	42 5.0	110 13.0	353 41.7	161 19.0	42 5.0	23 2.7	15 1.8	8 0.9	4 0.5	846 100	3083
め	3	31 ミッドウェー	28—30N 180—162W	64					30 6.8	120 27.3	22 5.0	70 15.9	91 20.7	59 13.4	13 3.0	21 4.8	7 1.6	5 1.1	1 0.23	439 100	1511
	8	32 ハワイ南西（5°N以北）	6—10N 180—160W	153				1 0.1	2 0.1	34 2.3	72 4.8	318 21.3	312 20.9	320 21.5	178 11.9	123 8.2	74 5.0	39 2.6	18 1.2	1491 100	9201
	1	36 ハワイ南西（5°N以南）	3—5N 164—153W	28					2 1.4	2 1.4	9 6.5	41 29.5	47 33.8	15 10.8	11 7.9	5 3.6	3 2.2	3 2.2	1 0.7	139 100	830
	1	0—15S 160—140W	7—12S 146—143W	19								1 1.3		18 23.4	24 31.2	15 19.5	10 13.0	8 10.4	1 1.3	77 100	240
	4	53 タヒチ	15—23S 151—138W	118						4 2.9	20 14.4	17 12.2	18 12.9	22 15.8	21 15.1	23 16.5	9 6.5	5 3.6		139 100	196
	1	61 トンガ	32—34S 172—166W	20							2 1.4	6 4.3	6 4.3	32 23.2	27 19.6	30 21.7	15 10.9	18 13.0	2 1.4	138 100	586
	10	30—35N 150E—180	29—34N 149—175E	164					15 1.5	237 24.0	38 3.8	209 21.1	244 24.7	116 11.7	35 3.5	50 5.1	26 2.6	14 1.4	4 0.4	989 100	1238
ば	10	62 伊豆東方	30—35N 139—146E	129				1 0.1	10 1.6	301 47.9	27 4.3	123 19.6	113 18.0	32 5.1	14 2.2	7 1.1	2 0.3			629 100	942
	3	55 南海	30—34N 136—140E	37					10 6.2	94 58.0	5 3.1	33 20.4	11 6.8	6 3.7	1 0.6	2 1.2				162 100	255
	12	35 西部太平洋	20—31N 134—175E	163				2 0.5	17 3.9	131 30.4	47 10.9	86 20.0	57 13.2	40 9.3	19 4.4	19 4.4	6 1.4	5 1.2	2 0.5	431 100	706

60 61 71 81 91 101 111 121 131 141 151 161

ち	2	63 南洋北部	10—13N 140—145E	22					1 0.7	27 18.9	11 7.7	31 21.7	28 19.6	18 12.6	21 14.7	2 1.4	4 2.8			143 100	162
	18	36 南洋南部	0—10N 139—178E	309			10 0.3	2 0.1	27 0.8	195 5.7	312 9.1	916 26.7	781 22.8	607 17.7	365 10.6	146 4.3	48 1.4	15 0.4	4 0.1	3428 100	8292
	9	35 ソロモン	0—11S 143—170E	176					19 2.7	92 13.0	163 23.0	237 33.4	92 13.0	52 7.3	31 4.4	9 1.3	5 0.7	2 0.3	7 1.0	709 100	1428 (230)
	1	34 ニューカレドニア	21—24S 154—159E	10			8 19.0			1 2.4	1 2.4	4 9.5	8 19.0	5 11.9	11 26.2	3 7.1	1 2.4			42 100	83
	1	バンダ 52 フロレス	5—7S 129—132E	11							9 8.6	10 9.5	20 19.0	30 28.6	20 19.0	15 14.3	1 1.0			105 100	230
	9	小スンダ 56 チモール	8—14S 115—131E	170						7 0.9	68 8.6	124 15.7	152 19.3	176 22.3	122 15.5	122 15.5	15 1.9	3 0.4		789 100	1499
	1	53 スマトラ	3N—7S 91—99E	28						12 7.2	22 13.2	45 26.9	34 20.4	28 16.8	19 11.4	6 3.6	1 0.6			167 100	714
	4	59 中部印度洋	4—10S 72—85E	100						37 5.4	35 5.1	78 11.4	128 18.7	155 22.6	138 20.1	94 13.7	18 2.6	2 0.3		685 100	2711

魚種 45	測定船数 3	漁場 1	操業位置 2	操業回数 6	9	40 cm 以下 46	41—50	51—60	61—70	71—80	81—90	91—100	101—110	111—120	121 cm 以上 47					計 25	漁獲尾数 48
13 び	1	アルキペラゴ	18—24S 140—134W	36	尾数 %							1 33.3	2 66.6							3 100	801
	2	30—40N 180—140W	30—32N 178—154W	37					1 0.5	3 1.4	67 30.6	95 43.4	51 23.3	2 0.9						219 100	322
	1	ミッドウェー	28—31N 180—175W	22					2 3.1	6 9.4	34 53.1	17 26.6	5 7.8							64 100	1257
	2	ハワイ南西 （5°N以北）	6—9N 178—172W	38						3 60.0	2 40.0									5 100	10
	1	タヒチ	17—18S 151—145W	18							4 7.3	34 61.8	17 30.9							55 100	480
	9	30—35N 150E—180	29—34N 149—175E	140					29 1.7	274 16.4	910 54.3	404 24.1	52 3.1	6 0.4						1675 100	8425
ん	5	伊豆東方	30—35N 139—149E	57				34 8.7	65 16.5	167 42.5	114 29.0	12 3.1		1 0.3						393 100	452
	2	南海	30—32N 136—140E	29					4 3.0	17 12.7	34 25.4	33 24.6	45 33·6	1 0.7						134 100	1256

なが	14	西部太平洋	20—31N 134—175E	194					12 0.8	124 8.0	445 28.6	705 45.4	222 14.3	46 3.0						1534 100	8995
	2	南洋北部	10—13N 140—145E	22							4 9.5	13 31.0	16 28.1	9 21.4						42 100	43 (105)
	2	南洋南部	0—3N 140—174E	28								1 11.1	7 77.8	1 11.1						9 100	18
	3	ソロモン	0—5S 143—159E	53							2 7.4	17 63.0	8 29.6							27 100	27 (6)
	1	スマトラ	3N—7S 91—99E	28							6 13.0	36 78.3	4 8.7							46 100	47
	4	中部印度洋	2—10S 69—86E	104							3 1.1	119 45.6	110 42.1	29 11.1						261 100	3159

魚種 45	測定船数 3	漁場 1	操業位置 2	操業回数 6	9	80 cm以下 46	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201 cm以上 47	計 25	漁獲尾数 48
くろまぐろ	1	30—40N 180—140W	30—32N 178—177W	10	尾数 %										1 100					1 100	1
	3	南海	30—34N 136—140E	37															2 100	2 100	2

魚種	測定船数	漁場	操業位置 2	操業回数 6	9	80 cm以下 46	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201 cm以上 47	計 25	漁獲尾数 48
いんどまぐろ	1	トンガ	32—34S 172—166W	20	尾数 %						2 3.4	12 20.3	17 28.8	14 23.7	14 23.7					59 100	147
	4	小スンダチモール	11—15S 116—124E	86						1 0.1		15 1.4	318 29.1	564 51.6	176 16.1	17 1.6	1 0.1			1092 100	2743

魚種	測定船数 3	漁場 1	操業位置 2	操業回数 6	9	130 cm以下 46	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201—210	211—220	221—230	231—240	241—250	251—260	261 cm以上 47	計 25	漁獲尾数 48
く	1	ガラパゴス	7—9S 114—109W	18	尾数 %				2 4.0	3 6.0	1 2.0	8 16.0	6 12.0	3 6.0	10 20.0	7 14.0	6 12.0	3 6.0	1 2.0		50 100	97
	1	0—15S 140—120W	6—12S 143—138W	25			1 1.4	3 4.2	4 5.6	13 18.3	2 2.8	12 16.9	4 5.6	9 12.7	7 9.9	4 5.6	7 9.9	2 2.8		3 4.2	71 100	218
	1	アルキペラゴ	18—24S 140—134W	36							2 5.0	15 37.5	10 25.0	2 5.0	4 10.0	1 2.5	3 7.5	2 5.0		1 2.5	40 100	1172

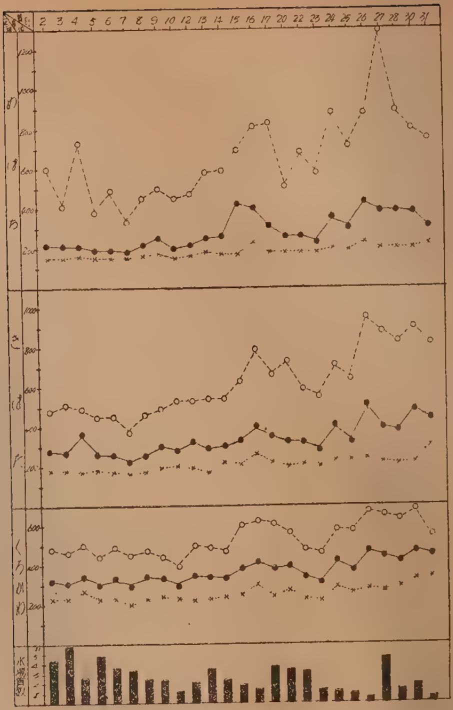
	2	31 ミッドウェー	28—31N 180—173W	42										1 33.3	1 33.3		1 33.3				3 100	3
17	6	ハワイ南西 32 (5°N 以北)	6—10N 180—163W	119		9 6.6	23 16.9	14 10.3	21 15.4	15 11.0	2 1.5	3 2.5	10 7.4	11 8.1	12 8.8	8 5.9	4 2.9		2 1.5	2 1.5	136 100	265
ろ	1	32 ハワイ南西 (5°N 以南)	3—5N 164—153W	28		1 2.1	8 17.0	6 12.8	5 10.6	10 21.3	2 4.3	1 2.1		7 14.9	3 6.4	1 2.1	2 4.3		1 2.1		47 100	162
	1	0—15S 160—140W	7—12S 146—143W	19					6 6.1	25 25.5	18 18.4	21 21.4	9 9.2	4 4.1	1 1.0	3 3.1	2 2.0	2 2.0	2 2.0	5 5.1	98 100	236
	3	33 タヒチ	15—23S 151—138W	75			1 0.3	6 1.5	24 6.1	91 23.3	89 22.8	62 15.9	23 5.9	18 4.6	22 5.6	19 4.9	14 3.6	12 3.1	7 1.8	3 0.8	391 100	1650
	4	30—30N 150E—180	29—33N 150—175E	69										1 12.5	4 50.0	1 12.5	1 12.5		1 12.5		8 100	10
	2	42 伊豆東方	30—34N 139—144E	24															1 50.0	1 50.0	2 100	2
か	7	35 西部太平洋	20—30N 134—152E	99			1 9.1				2 18.2		3 27.3	1 9.1		1 9.1	1 9.1			2 18.2	11 100	11
	2	43 南洋北部	10—13N 140—145E	22		15 13.0	13 11.3	26 22.6	24 20.9	22 19.1	3 2.6	1 0.9	2 1.7	2 1.7	2 1.7	3 2.6	1 0.9	1 0.9			115 100	102 (112)
	12	36 南洋南部	0—10N 139—178E	237		37 8.7	65 15.4	61 14.4	82 19.4	71 16.8	24 5.7	15 3.5	19 4.5	20 4.7	12 2.8	8 1.9	7 1.7			2 0.5	423 100	619
	10	37 ソロモン	0—10S 143—170E	212		19 5.5	43 12.4	72 20.8	61 17.6	61 17.6	33 9.5	11 3.2	13 3.8	10 2.9	7 2.0	6 1.7	3 0.9	2 0.6	3 0.9	2 0.6	346 100	585 (88)
わ	1	ニュー 34 カレドニア	14—22S 150—155E	15			1 1.4	4 5.6	7 9.7	21 29.2	10 13.9	8 11.1	5 6.9	4 5.6	5 6.9	2 2.8	1 1.4	1 1.4	2 2.8	1 1.4	72 100	81
	1	バンダ 52 フロレス	5—7S 129—132E	11					5 12.8	7 17.9	7 17.9	5 12.8	2 5.1	7 17.9	4 10.3				1 2.6	1 2.6	39 100	30 (40)
	8	小スンダ 56 チャール	8—14S 115—131E	160		1 0.5	2 0.9	10 4.7	23 10.7	59 27.4	42 19.5	26 12.1	14 6.5	7 3.2	9 4.2	7 3.2	8 3.7	2 0.9	4 1.9	1 0.5	215 100	261
	1	53 スマトラ	3N—7S 91—99E	28				9 6.2	24 16.6	46 81.7	21 14.5	18 12.4	7 4.8	7 4.8	1 0.7	5 3.4	3 2.1	2 1.4	1 0.7	1 0.7	145 100	182
	4	54 中部印度洋	2—10S 69—86E	104		2 0.7	5 1.5	14 4.8	34 11.6	84 28.6	76 25.8	23 7.8	9 3.1	11 3.7	9 3.1	15 5.1	4 1.4	5 1.5	2 0.7	1 0.3	294 100	457 (117)

魚種 45	測定船数 3	漁場 1	操業位置 2	操業回数 6	130 cm 以下 46	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201—210	211—220	221—230	231—240	241—250	251—260	261 cm 以上 47	計 25	漁獲尾数 48
18 しろかわ	1	26 ガラパゴス	7— 9S 114—109W	18										1 50.0		1 50.0				2 100	7
	1	0— 15S 140—120W	6— 12S 143—138W	25								1 100								1 100	5
	5	32 ハワイ南西 (5°N 以北)	6— 10N 180—163W	101		7 16.3	20 46.5	8 18.6	2 4.7	1 2.3				1 2.3	1 2.3				3 7.0	43 100	46
	1	0— 15S 160—140W	7— 12S 146—143W	19							1 100									1 100	5
	3	33 タ ヒ チ	15— 23S 151—138W	75						1 12.5							1 12.5	2 25.0	4 50.0	8 100	20
	2	30— 35N 150E—180	30— 33N 150—161E	37					1 50.0				1 50.0							2 100	2
	2	35 西部太平洋	27— 30N 142—152E	28				1 50.0		1 50.0										2 100	3
	9	36 南洋南部	0— 9N 140—178E	162	6 22.2	1 3.7	4 14.8	5 18.5	1 3.7	2 7.4	1 3.7	2 7.4	3 11.1		1 3.7	1 3.7				27 100	33
	8	37 ソ ロ モ ン	0— 11S 143—170E	178	1 2.4		3 7.1	6 14.3	3 7.1	4 9.5	5 11.9	5 11.9	3 7.1	4 9.5	2 4.8	1 2.4	3 7.1		2 4.8	42 100	79 (26)
	1	34 ニュー カレドニア	14— 22S 150—155E	15				2 13.3	1 6.7		3 20.0	1 6.7	3 20.0			2 13.3	2 13.3		1 6.7	15 100	25
	1	52 バンダ フロレス	5— 7S 129—132E	11		4 10.8	5 13.5	4 10.8	6 16.2	4 10.8	6 16.3	2 5.4	3 8.1	1 2.7	1 2.7	1 2.7				37 100	43
	8	51 小スンダ チモール	8— 14S 115—131E	160	11 3.2	23 6.6	43 12.4	39 11.2	25 7.2	43 12.4	50 14.4	36 10.3	36 10.3	22 6.3	10 2.9	5 1.4		1 0.3	4 1.1	348 100	434
	1	53 ス マ ト ラ	3N— 7S 91— 99E	28		2 3.2	1 1.6	7 11.3	3 4.8	8 12.9	8 12.9	7 11.3	10 16.1	4 6.5	3 4.8	5 8.1	1 1.6	1 1.6	2 3.2	62 100	67
	5	50 中部印度洋	2— 10S 69— 86E	118		1 0.8	7 5.9	4 3.4	3 2.5	11 9.2	14 11.8	24 20.2	22 18.5	13 10.9	8 6.7	7 5.9	3 2.5		2 1.7	119 100	204

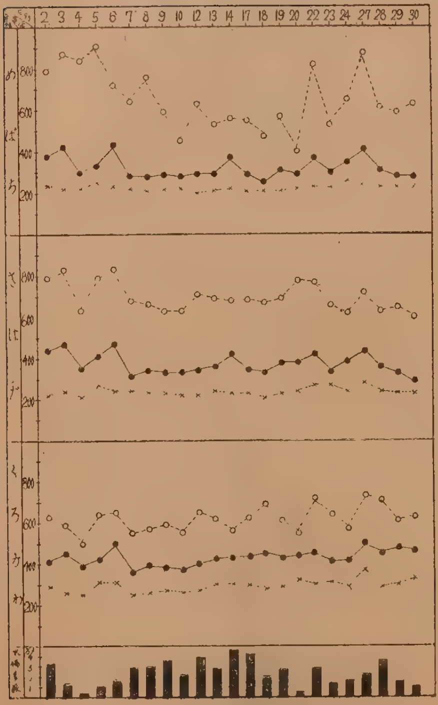
45 魚種	3 測定船数	1 漁場	2 操業位置	6 操業回数	100 cm 以下 46	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201—210	211—220	221—230	231 cm 以上 41	計 25	47 漁獲尾数
14 ま	1	29 ガラパゴス	7— 9S 114—109W	18											2 66.6	1 33.3				3 100	17

春	1	0— 15S 140—120W	6— 12S 143—138W	25						1 9.1		3 27.3		1 9.1	3 27.3	1 9.1	1 9.1	1 9.1			11 100	11
	1	アルキ 60 ペラゴ	18— 24S 140—134W	36			2 25.0	2 25.0	2 25.0		1 12.5				1 12.5						8 100	10
19. か	3	30— 40N 180—140W	30— 31N 178—154W	49							1 3.3	3 10.0		7 23.3	13 43.3	6 20.0					30 100	30
	3	ミッド 31 ウエー	28— 30N 180—162W	64							2 4.5	3 6.8	2 4.5	11 25.0	21 47.7	4 9.1	1 2.3				44 100	51
	6	ハワイ南西 (5°N以北)	6— 10N 180—163W	119						3 8.8		8 23.5	5 14.7	10 29.4	3 8.8		1 2.9	2 5.9	2 5.9		34 100	78
	1	61 ト ン ガ	32— 34N 172—166W	20											1 1.8	13 23.6	30 54.5	11 20.0			55 100	139
	7	30— 35N 150E—180	29— 34N 150—175E	115							2 2.3	6 7.0	12 14.0	28 32.6	21 24.4	14 16.3	3 3.5				86 100	102
じ	5	62 伊豆東方	30— 35N 139—146E	69								3 27.2	2 18.2	2 18.2	3 27.3	1 9.1					11 100	17
	3	南　海	30— 34N 136—140E	37								6 28.6	3 14.3	6 28.6	5 23.8	1 4.8					21 100	21
	12	35 西部太平洋	20— 31N 134—175E	163			1 0.5	3 1.6	1 0.5	12 6.4	11 5.9	49 26.2	51 27.3	30 16.0	18 9.6	8 4.3	3 1.6				187 100	242
	2	63 南洋北部	10— 13N 140—145E	22					2 1.3	19 12.6	11 7.3	74 49.0	41 27.1	3 2.0	1 0.7						151 100	112 (151)
	11	南洋南部	0— 10N 139—174E	217					1 1.1	7 7.7	8 8.8	35 38.5	6 6.6	9 9.9	17 18.7	7 7.7		1 1.1			91 100	100
き	3	ソロモン	0— 10S 144—164E	75								2 12.5	2 12.5	8 50.0	2 12.5		2 12.5				16 100	16 (12)
	1	34 ニュー カレドニア	14— 22S 150—155E	15											2 100						2 100	21
	8	小スンダ 56 チモール	8— 13S 115—131E	146					1 0.8	16 12.6	43 33.9	48 37.8	11 8.7	7 5.5	1 0.8						127 100	124
	1	スマトラ	3N— 7S 91— 99E	28						1 11.1	2 22.2	4 44.4			2 22.2						9 100	10
	3	中部印度洋	4— 10S 72— 86E	86					1 0.7	10 6.8		9 6.1	4 2.7	41 27.9	58 39.5	23 15.6	1 0.7				147 100	165 (88)

魚種	測定船数	漁場	操業位置	操業回数		80 cm 以下	81—90	91—100	101—110	111—120	121—130	131—140	141—150	151—160	161—170	171—180	181—190	191—200	201 cm 以上	計	漁獲尾数
めかじき	1	30— 40N 180—140W	30— 32N 160—154W	27	尾数 %					1 7.1		3 21.4	1 7.1			2 14.3	4 28.6		3 21.4	14 100	14
20	2	32 ハワイ南西 (5°N 以北)	6— 9N 179—167W	41					1 20.0	1 20.0		1 20.0	2 40.0							5 100	14
	1	33 タ ヒ チ	15— 23S 145—138W	39													2 100			2 100	9
	1	61 ト ン ガ	32— 34N 172—166W	20						1 9.1		2 18.2	1 9.1		2 18.2	2 18.2	1 9.1		2 18.2	11 100	15
	5	62 30— 35N 150E—180	29— 34N 157—175E	79				3 2.1	3 2.1	5 3.5	14 9.8	42 29.4	20 14.0	13 9.1	11 7.7	8 5.6	7 4.9	7 4.9	10 7.0	143 100	375
	13	伊豆東方	30— 35N 139—151E	178		3 0.2	8 0.6	88 6.2	60 4.3	148 10.5	226 16.0	264 18.7	221 15.7	141 10.0	106 7.5	68 4.8	41 2.9	16 1.1	21 1.5	1411 100	1644
	3	55 南　　海	30— 34N 136—140E	37		2 8.7		3 13.0	1 4.3	2 8.7	2 8.7	6 26.1	3 13.0	2 8.7			1 4.3	1 4.3		23 100	26
	9	35 西部太平洋	20— 30N 134—152E	123		2 1.4		1 0.7	3 2.0	8 5.4	21 14.3	48 32.7	24 16.3	10 6.8	11 7.5	4 2.7	4 2.7	3 2.0	8 5.4	147 100	191
	10	63 南洋北部	10— 12N 142—145E	10						2 50.0	2 50.0									4 100	4
	7	56 南洋南部	0— 10N 139—174E	93				1 4.2		10 41.7	3 12.5	4 16.7	1 4.2			1 4.2	3 12.5		1 4.2	24 100	25
	4	38 ソ ロ モ ン	0— 10S 143—164E	84				1 6.3			1 6.3	5 31.3	6 37.5	1 6.3	1 6.3	1 6.3				16 100	19 (5)
	7	小スンダ 56 チモール	8— 13S 118—131E	129			1 1.8	3 5.5	1 1.8	5 9.1	11 20.0	11 20.0	8 14.5	5 9.1	5 9.1	2 3.6	3 5.5			55 100	55 (29)
	1	ス マ ト ラ 57	3N— 7S 91— 99E	28					1 14.3	1 14.3	2 28.6	1 14.3	1 14.3						1 14.3	7 100	15
	2	中部印度洋 59	4— 10S 72— 86E	55				1 4.8		2 9.5	4 19.0	3 14.3	1 4.8	5 23.8	3 14.3	1 4.8	1 4.8			21 100	25



鮪類水揚価格表（三崎）昭和三十三年七月



鮪類水揚価格表（三崎）昭和三十三年八月

Mimura, K.
Fishing Condition of the Indian Ocean.

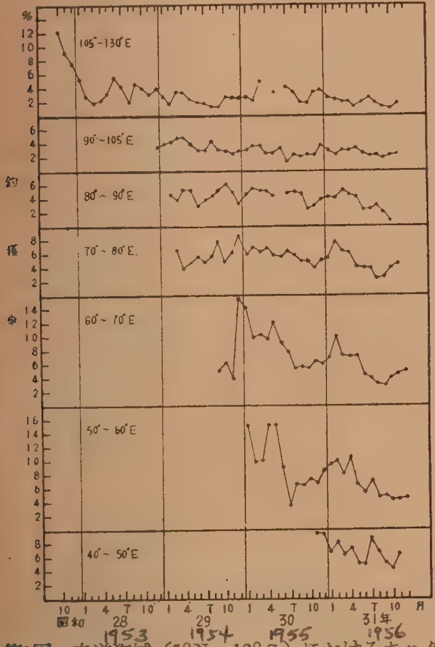
TRANSLATION IN
REPRINT FILE

印度洋の漁況

南海区水産研究所
技官　三村皓哉

（鮪漁業講演会講演要旨　神水試講堂　1958. 8. 7.）

印度洋で最も重要な対象魚であるキハダの釣獲率の年々の変化及び海域別の生産性（全魚種を合せた）について，図にもとずいて若干説明したいと思います.



第1図　赤道海域（5°N～13°S）におけるキハダの月別，年別の平均釣獲率

第1図は印度洋のキハダ漁場の中心である5°N～13°Sの海域を，105°E以東，90°～105°E，80°～90°E，70°～80°E，60°～70°E，50°～60°E，40°～50°E，と7つの海区にわけて，それぞれの海区におけるキハダの月別の平均釣獲率を求めて図示したものです.

この図から次のような現象がみとめられます.

1.　釣獲率は年の前半に高く，後半に低くなっていること.
2.　西寄りの海域程釣獲率が高いこと.
3.　各海区共操業開始当初には釣獲率が高く，以後2，3年は，年次の経過に伴なって漸次低下を示していること.

1. は釣獲率の季節変化をあらわすもので，50°～60°E，60°～70°E，70°～80°E の各海区で特に明瞭になっていますが，1～6月に釣獲率が高く7～12月低くなることは，操業海域全般にわたってみられる現象です.

2. の点については，図の昭和30年の各海区の値を比較してみると極めてはっきりします．併しこれは3. で述べるように，西の海域では操業開始当初の最も高い時期の釣獲率が示されており，東の海域では既に釣獲率が低くなった時期の値が示されているため，とくに著しい差となって現われているものと考えられます．今後もこのような大きな差を示すものとは考えられません.

3. についても可成りはっきり図に現れています．このような低下がどのような原因によって起ったかと云うことは極めて重要な問題です．ここでは考察の段階は省略して結論だけお話しします.

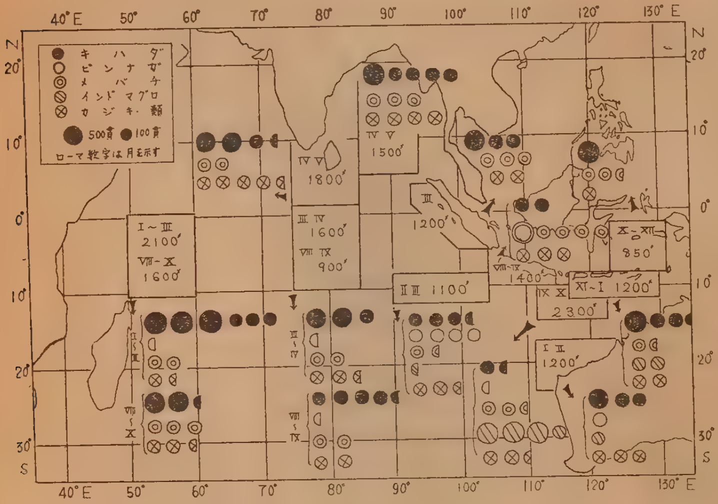
このような釣獲率の低下は漁獲の影響と自然変動とが一緒に作用して起ったものと考えられます．図にみられるように，操業開始年から2～3年目にかけて，釣獲率の低下が著しくあらわれておりますが，この現象は主として漁獲の影響によるものと思われます.

併し，105°～130°E，50°～60°E，60°～70°Eの各海区でみられるような急激な釣獲率の低下は単に漁獲の影響のみによるものでなく，操業開始の年が，たまたま，丁度釣獲率の高い年に当っていたために，2年目の釣獲率の低下が過大に現れて来たものと思われます.

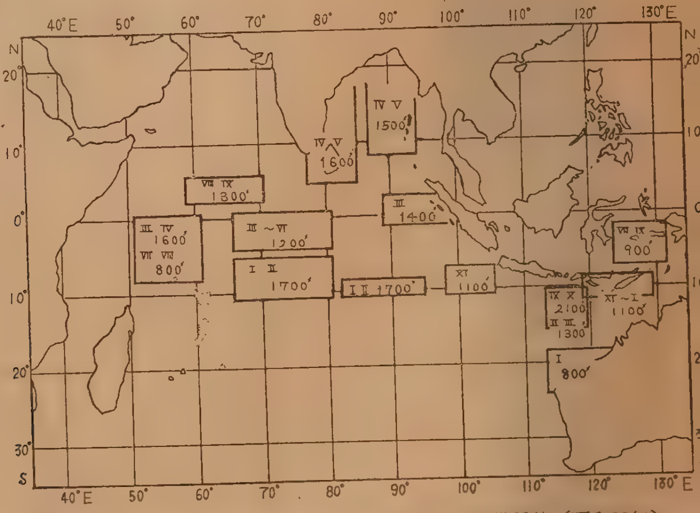
ともあれ，操業を開始してから2～3年経過して後は，105°～130°Eの海区の値でわかるように，釣獲率は高くなったり低くなったりして~~はいますが~~，一方的に低下をすることはありません．このような点から考えますと，釣獲率の経年変化において，漁獲の影響が表面に現われるのは，操業開始直後の或る期間に限られ（理論的には漁獲物の年令構成によって支配される），以後における変化には自然の要因による影響が支配的になるものと思われます．このように考えますと，漁獲努力が今後も継続して加えられるならば，操

業開始当初のような高い釣獲率を示すことはむしろ異常な状態なのであろうと思われます．したがって，今後は，印度洋の漁場で，操業開始当初のような高い釣獲率を期待することは無理だろうと思います．

第2図及び第3図に印度洋漁場における昭和31年，32年の一回操業当りの漁獲貫数を示しました．詳細な説明ははぶいて，図によって判断して戴くことにしますが，今後の印度洋の各漁場の生産性は，凡そ両図に示された程度を持続して行くものと予想しております．勿論，年によって可成りの高低はあるでしょうが，平均してみるとこの程度の値を前後するだろうと思われます．


● キハダ
○ ビンナガ
◎ メバチ
⊘ インドマグロ
⊗ カジキ類
500貫 100貫
ローマ数字は月を示す
40°E 50° 60° 70° 80° 90° 100° 110° 120° 130°E
N 20° 10° 0° 10° 20° 30° S
I～III 2100′
VIII～X 1600′
IV V 1800′
IV V 1500′
III IV 1600′
VIII IX 900′
III 1200′
II III 1100′
VIII～IX 1400′
IX X 2300′
X～XII 850′
XI～I 1200′
I II 1200′

第2図 1操業当りの漁獲量及び魚種組成（昭和31年）


40°E 50° 60° 70° 80° 90° 100° 110° 120° 130°E
N 20° 10° 0° 10° 20° 30° S
IV V 1500′
IV V 1600′
VIII IX 1300′
III IV 1600′
VII VIII 800′
III～VI 1200′
I II 1700′
I II 1700′
III 1400′
XI 1100′
VIII IX 900′
IX X 2100′
II III 1300
XI～I 1100′
I 800′

第3図 印度洋の主要漁場における一操業当りの漁獲貫数（昭和32年）
ローマ数字は月を示し，アラビヤ数字は操業一回当りの漁獲貫数を示す．

Fishing Ground of Australian Bluefin and the fishing grounds of Bigeye + Yellowfin in The Eastern Equatorial sea area.
KAMIMURA, TADAO.

ゴウシュウマグロの漁場及び東部赤道海域における メバチとキハダの漁場

TRANSLATION IN Reprint File

南海区水産研究所
技官　上村忠夫

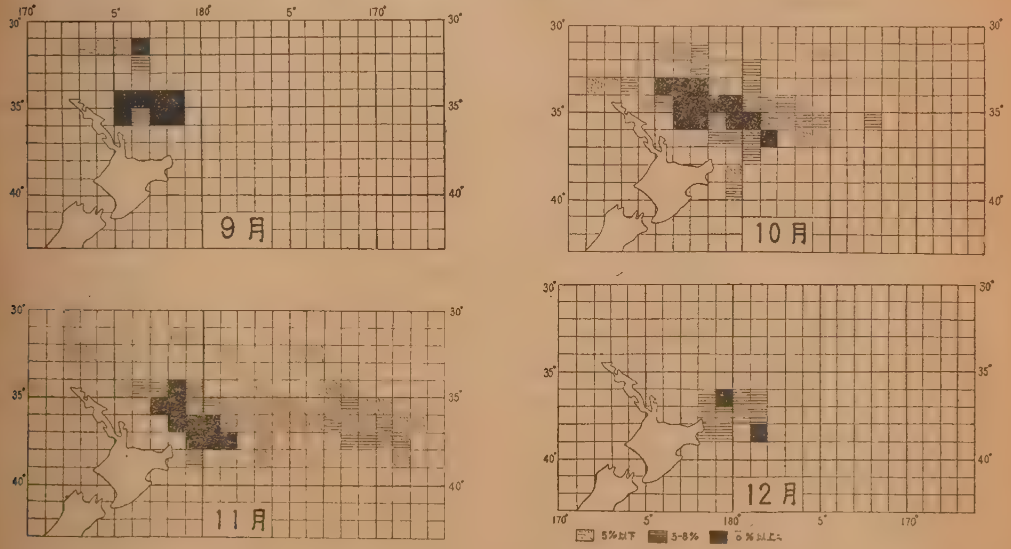
（鮪漁業講演会講演要旨　神水試講堂　1958. 8. 7）

これら二つの漁場は，何れも極く最近に至って開発された新しい漁場で，今のところ資料が不充分で，詳しいことは未だ判っておりません．したがって，ここでは実情の紹介を中心として，若干の説明を行ってみました．

I　ゴウシュウマグロの漁場

この漁場を発見した最初の船は，水産庁調査船照洋丸（602ton）であります．同船は一昨年（昭和31年）9～10月にかけて，現在の漁場の東縁部からそれより沖合にかけて調査を行い多数のゴウシュウマグロを漁獲しました．しかし当業船が実際にこの海域に出漁したのは，一年後の昨年8月でありまして，さらに多数の船が出漁するようになったのは9月以降のことであります．ここでは．取敢えず昨年9～12月の資料に基づいて漁況のとりまとめを行ってみました．

(1)　漁況の変化



第1図　ゴウシュウマグロの月別の漁況

第1図は，昨年9月以降に得られた資料に基づいて，漁場の拡がりと釣獲率（鈎100本当りの漁獲尾数，%であらわされる）の地域的な散ばりを示したものです．釣獲率8%以上，8～5%，5%以下の三階級に分けて示してあります．

図にみられるように，漁場はニュージーランド諸島の沿海から東方沖合にかけて形成されています．9月には島に近接した極く狭いところで操業が行われていますが，10～11月にかけて沖合へと著しく拡がっています．しかし，これは漁況の季節変化をあらわすものでなく，恐らく出漁船の増加による新しい海域への漁場探索による結果と思われます．12月に入ると，沖合の部分は消失し，再び9月の状態にもどっておりますが，これは後述するように，漁況の衰退と関連しているように思われます．

漁場の南北方向の移動をみると，9～10月には35°S付近に位置していますが，11，12月にかけて全般的に南寄りへの移動が認められ，12月には35° S以

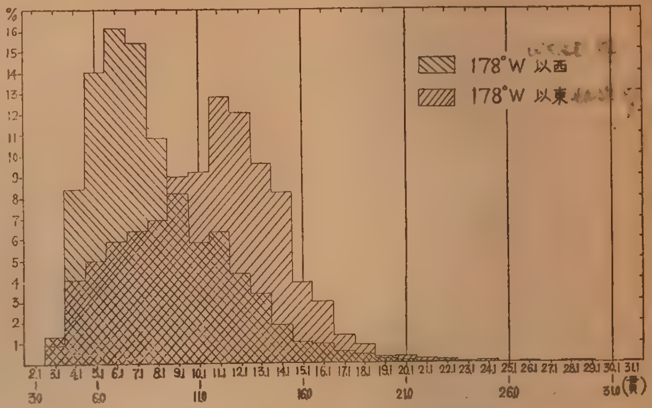
南に移っています．このような変化は魚群の南下移動によるものと思われます．1 月以降については，未だ資料のとりまとめを終っていないので，詳しいことは不明ですが，南下移動はさらに 1 月以降へと続いているようであります．

釣獲率は各月とも極めて高い値を示しております．しかし可成り著しい地域差や季節変化も認められます．即ち，まず地域差についてみると，ニュージーランドに近接した海域で最も高く，8 %以上及び8～5%の区劃が集中していますが，沖合へ向って減少の傾向を示しています．11月の漁況図によると，上述のニュージーランドに近接したところと，沖合の170°W付近のところの二ヵ所に，それぞれ高率を示す区劃が集中し，その中間部には低率の区劃が介在しています．しかし11月以外の沖合の資料を欠いているので，この現象が魚群の分布や移動とどのような関係にあるのか，また年々決ってあらわれるものかどうかというような問題について現状では言及できません．次の季節変化については，ニュージーランドに近接したところで，9～12月にわたって資料が得られているので，それの比較が一応の目安をあたえるものと考えられます．図によって，月別の釣獲率を比較すると，9 月から11月にかけて，大きな変化は認められませんが，11月から12月にかけてやや著しく低下しています．11月から12月にかけての釣獲率の低下は，前述の12月における漁場の縮小と相まって，12月以降における漁況の衰退をあらわすものと思われます．

前述したように，漁場の東縁部からそれより沖合の海域を照洋丸が調査を行っているので，次にその結果を簡単に紹介してみましょう．(その詳細は，既に「鮪漁業」36号に報告されている）。同船の調査範囲は，正確には，172°～156°W（但し30°S以南）です．漁獲試験の結果によると，167° W付近までは，釣獲率にして 7 %前後の可成り高い値を得ておりますが，160°W付近から急速に低下し（4%前後），東の端の156°W付近では 1 %足らずの極めて低い値となっています．調査回数が少いので（12回）決定的なことは申し上げられませんが，このような結果から考えますと，ゴウシュウマグロの濃密に分布する範囲は精々160°W止りで，それ以東では急激に減少する可能性があるわけであります．

(2) 魚 体 組 成

魚体は，主として 4 ～17貫のものによって占められていますが，次にのべるように，漁場の東西で著しく異っています．第 2 図は，漁場を178°W以西と以東の海域に分けて体重組成を示したものです．図にみられるように，178°W以西では 6 貫前後のものの割合が多く，以東では11貫前後のものの割合が多くなっています．照洋丸の調査海域における魚体組成は図示しませんでしたが，178°W以東の組成よりも一段と大型化し，15貫前後及びそれ以上のものが主体となっております．したがって，以上に述べたことを綜合すると，ニュージーランドに近接したところでは，6 貫前後の小型群が主体となっているが，沖合に移行するにしたがって大型のものの割合が増加し，175°W付近では11貫前後の中型群が，さらに沖合の160°W付近では15貫もしくはそれ以上の大型群が主体となるに至っていると考えることができます．



第 2 図　ゴウシュウマグロの体重組成

さきに釣獲率の地域差について，西寄りで高く，東寄りで低くなっていることを指摘しましたが，魚体はそれとは反対に西寄りで小さく，東寄りで大きくなっています．したがって，東西両海域の漁場としての優劣は簡単には決め得ないことになります．しかし釣獲率と魚体の大きさとを掛け合せて，操業一回当りの漁獲貫数（ゴウシュウマグロのみ）を求めてみたところ，ニュージーランドの直ぐ近くでは1300貫前後，沖合の175°W付近では1, 100貫前後の値が得られ，貫数だけからみると西寄りの海域が

干勝っているという結果が得られています.

(3) 漁場における表面水温

この方面の海況資料が殆どないので，ここでは漁船の漁況報告に基づいて表面水温と操業回数との関係をしらべてみました．その結果を第1表に示してあります．11月については，第1図に示されるように，他の月に比して漁場が著しく沖合にまで延びているので，175°W以西と以東の二つの海域に分けて示してあります．表にみられるように，9月及び10月における表面水温の最低及び最高の温度は一致し，それぞれ15.3°C及び17.2°Cで，その巾は2°Cとなっています．11月における水温は175°W以西と以東の海域で著しく異なり，以西では，15.7°〜17.6°Cであるのに対して，以東では14.9〜16.8°Cを示し，東寄りの海域が平均して約1°C低くなっています．このような事実は，西寄りの海域で低水温帯がより北方にまで進出していることを教えています．12月の水温は，9〜12月を通じて最も高く，さらに，最近，最高の温度巾も極めて大きくなっています．これは12月における漁場の拡がりが著しく狭いのと一見矛盾しておりますので，念のため，水温の等温線を描いてみました．その結果，漁場の中央部に18°C代の孤立した水帯が認められ，温度巾の大きいのもそのためであることが判りました．しかしながら，そのような游離水帯の発生が季節的なものであるか，それとも特定の場所に限ってあらわれているものであるか，等については言及出来ません．

第一表　ゴウシュウマグロ漁場における表面水温

month 月	temp. 水温°C 海域 area	14.9 〜 15.2	15.3 〜 15.6	15.7 〜 16.0	16.1 〜 16.4	16.5 〜 16.8	16.9 〜 17.2	17.3 〜 17.6	17.7 〜 18.0	18.1 〜 18.4	18.5 〜 18.8
9	34°−36°S，175°　−179°E		3	14	7	2	2				
10	33°−38°S，175°E−175°W		23	14	22	2	1				
11	34°−38°S，175°E−175°W			6	30	32	14	4			
	34°−38°S，175°　−166°W	6	14	7	1	1					
12	36°−39°S，178°E—178°W			1	11	21	26	1	1	13	4

以上に述べたように，漁場における表面水温は，9，10月から12月にかけて若干上昇していることが判ります．また，12月を除く各月の最低，最高の温度巾は2°C内外で比較的小さい値を示しております．このような事実は，漁場における表面水温の分布が概して単純であることを教えています．

さきに，漁場の移動から魚群は10月から12月にかけて南下すると申しましたが，これは上述の表面水温の季節変化から理解されるように，10〜12月にかけての寒流系勢力の衰退によるものと推定されます．

(4) 今後における問題点

漁況と関連して今後における二，三の問題点にふれてみましょう．その一つは，ゴウシュウマグロの漁場における魚種組成から，次のような可能性が考えられるということであります．さきに操業一回当りゴウシュウマグロの漁獲量は1,100〜1,300貫に達すると述べましたが，この漁場ではゴウシュウマグロ以外の混獲物は極めて少なく，わずかにビンナガが200貫前後混る程度であります．このように，漁獲物が只一種のものによって独占されているという事実は，全体としての（全魚種を含めた）漁況が不安定になっている可能性を意味しております．つまり，他の漁場ですと，漁獲物は二種もしくはそれ以上の重要魚種によって構成されているのが普通です．そのような魚場では，例えある魚種のある年の漁況が不振であったとしても，他の魚種の埋め合せによる補いを期待出来ますが，単一の魚種によって構成される場合には，そのようなことは望めません．したがって，全体としての漁況が年によって大きく変化する可能性があるわけです．

次に，これと同様な性格を帯びている問題として，ゴウシュウマグロの年令構成にも注意する必要があります．第2図の体重組成をみると，6貫前後のところと，11貫前後のところの二ヵ所に明瞭な山が認められますが，これらの体型群は恐らく一ヵ年異った年令群に属すると考えられます．したがって，もしこの推定に誤りがなければ，漁獲物の主要

部分は，ほとんど二つの年級群によって占められていると考えることができます．とくに，海域別にみると，上述の年級群は，それぞれ単独で，組成において極めて大きな割合を占めていることが判ります．このような事実も，前述の魚種組成に基づいて考えたことと同様に，ゴウシュウマグロの漁況の不安定性を暗示しております．つまり，漁獲物を構成している年級群の数が少ないことは，例えば添加される魚群量の年による大小といった自然の要因による影響を敏感に受け易い性格を意味しているからです．

いうまでもなく，以上に述べた二つのことは，単に可能性を問題としているにすぎませんが，前述のような危険性があるということは，今後におけるゴウシュウマグロの漁況の推移に，とくに慎重な配慮を払う必要のあることを教えております．

次のことは，ゴウシュウマグロの漁況と直接関係はありませんが，ゴウシュウマグロとインドマグロが同一の種類であるか，それとも異った種類に属するかという問題が残されています．照洋丸がゴウシュウマグロを漁獲した当時は，インドマグロとは異った種類であるとする考えが強かったのですが，その後色々の面から検討が加えられた結果，同一種類ではないかという考えが強まってきております．しかしながら，この点は未だ確められるには至っておりません．ところで，もし両者が同一種類であるとすると，次のような可能性に注意する必要があります．即ち．ゴウシュウマグロとインドマグロの漁獲物の魚体組成を比較すると，ゴウシュウマグロでは15貫以下の中，小型群が主体となっているのに対して，インドマグロでは15貫以上の大型群が主体となっています．このことは，年令組成という観点からみるとゴウシュウマグロは低年群，インドマグロは高年群によって構成されていることをあらわしております（生態的には，ゴウシュマグロは索餌群，インドマグロは産卵群と考えられる）．したがって，インドマグロは，ゴウシュウマグロの漁場の開発によって，低年の Stage においても漁獲の影響をうけるようになったと考えることができるわけです．つまり，インドマグロの漁況における漁獲の影響を考えるのに，従来よりも心配の種が一つ増えたと考えなければなりません．この点，インドマグロの今後数年間における漁況の推移を，とくに注意して見守る必要があります．

Ⅱ　メバチとキハダの漁場

既に述べたように，この漁場は赤道海域の東縁部に位置しています．この漁場が開発されたのは，昭和30年頃からでありますが，多数の船が出漁するようになったのは，ゴウシュウマグロの漁場と同様昨年（昭和32年）からのことであります．一昨年，昨年と続いた印度洋における漁況の不振がそれの大きな原因になっています．ここでは，昨年と一昨年の資料にもとずいて（実際には昨年の資料が大部分），漁況の取りまとめを行った結果について報告します．

この漁場における漁況の最も大きな特徴としては，

(イ) メバチとキハダの濃密に分布する海域が互に重なり合っていること．

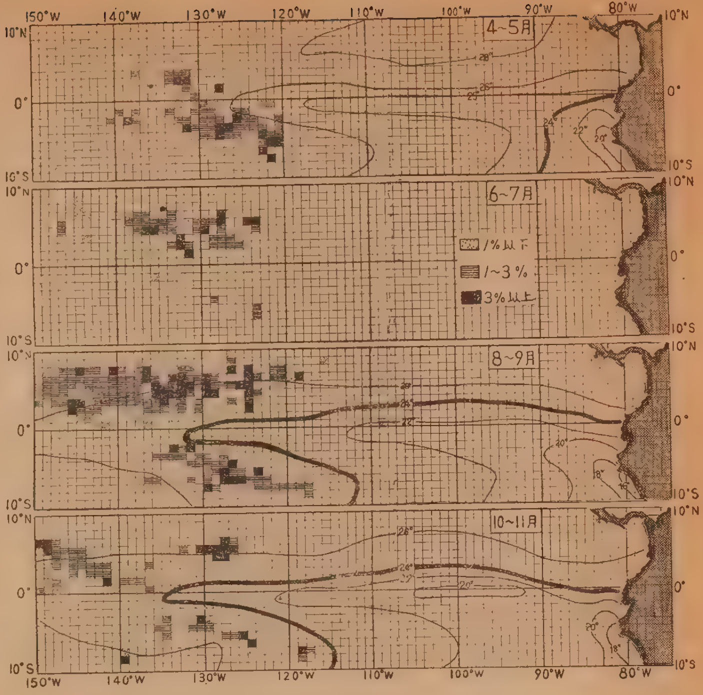
(ロ) 漁況の変化と，赤道にそって米大陸から西方へと進出している冷水帯の消長との間に密接な関連が認められること，の二つが数えられます．

(イ)については，この漁場と，漁場の西側とにおけるメバチとキハダの釣獲率を，それぞれ魚種別に比較すると，両海域の間で，それ程大きな差はみられません．ただ，両魚種の分布の重なり具合に差があり，この漁場では一致度が高くなっています．そして，この事実が，この漁場における生産性を高めている大きな原因になっています．また，この漁場におけるメバチとキハダの魚体は極めて大きく，平均するとメバチは20貫前後，キハダは15貫前後に達しています．このようなことも漁場における生産性を高めている原因の一つに数えられます．

(ロ)の漁況と海況との関連については，それを判り易く図示したのが第3図A（メバチ）及びB（キハダ）です．両魚種とも，3%以上，1〜3%，1%以下の三階級に分けて釣獲率の散らばりを示し，別にメバチ（A図）のところには表面水温の分布（水路部発行の北太平洋海流図より引用）を書き入れてあります．上段から4,5月，6,7月，8,9月，10,11月とそれぞれ2ヵ月刻みに区切ってありますが，12〜3月の間は資料が極めて少いので，ここでは省きました．また，6,7月の水温の分布は資料がないので記入してありません．

まずA図によって表面水温についてみると，低温の水帯がほぼ赤道にそって米大陸側から西方へと進出していることがはっきり判ります．とくに大陸に近接した海域における水温をみると，赤道に近いところであるにもかかわらず，20°C前後の極めて低い水帯が認められます．このような異常に低い水帯がここに出現しているのは，南米大陸にそって南から北へ向って流

れている寒流系のフンボルト海流（別名，ペルー海流）の影響によるもので，20°C 前後の水帯は，この海流の北の末端部に当っているものと考えられます．そしてフンボルト海流の存在が，前述の赤道にそって西寄りへと進出している低水温帯の大きな源泉になっているのであります．しかし，低水温帯の発達の模様には著しい季節変化が認められます．即ち，太線で示した 24°C の等温線の分布が比較の一応の目安となるので，それの西端部の位置を調べてみると，4, 5 月には 90°W 付近にありますが，8, 9月，10, 11月には130°Wを越えて，さらに西寄りにまで及んでいることが判ります．つまり，低水温帯の西寄りへの進出は 4, 5 月には弱く，8, 11月には強くなっていると考えることが　できます．



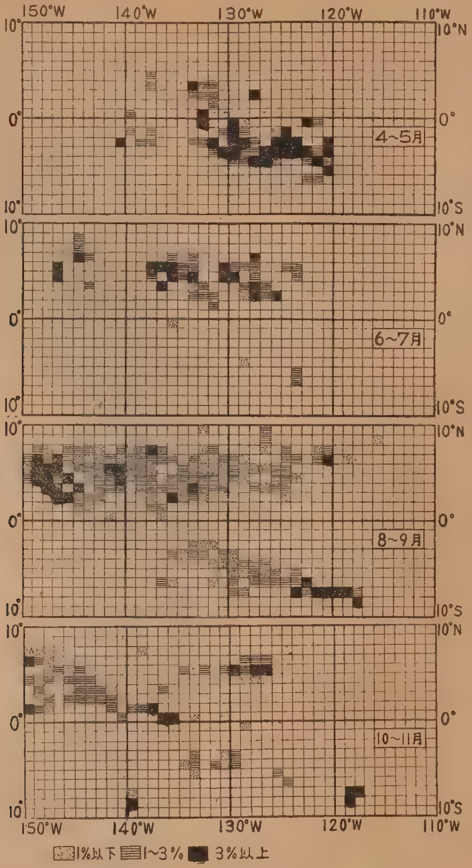
第3図　漁況と海況との関連（A：メバチ）

このような低水温帯の季節的消長と漁場形成との関連を，次に調べてみましょう．A，B両図にみられるように，低水温帯の東寄りへの後退期に当る4, 5 月には，北太平洋側の漁場分枝と，南太平洋側のそれとの分離は不明瞭で，両者は殆ど癒合しているような状態となっています．ところが，低水温帯の西寄りへの進出期に当る8, 9月，10, 11月における漁場形成をみると，その東縁部は赤道を境界にして太平洋側と南太平洋側とに大きく枝分れして，その中央部に冷水帯が楔状に突入しているような状態となっています．このような変化は，明らかに冷水帯の消火が，漁場形成に大きな影響をあたえていることを教えています．

一方，釣獲率の季節変化をみると，階級別に示した釣獲率の混り具合からみて，極く大まかには次のような変化を指摘出来るようであります．即ち，メバチは4, 5月に低く，8, 9月及び10, 11月に高くなっているが，キハダは4, 5月に高く，8, 9月及び10, 11月に低く，両魚種の季節変化は逆になっている傾向がうかがわれます．このような相違の原因について，立入っては言及できませんが，この現象が冷水帯の季節的消長と密接に関連していることは容易に予想されることです．恐らく，メバチ，キハダともに冷水帯の発達や衰退にともなって，原則として東西方向の後退及び進出を行っているものと考えられますが，ただメバチがキハダに比してより冷水帯に適応していることが，上述の相違の大きな原因になっているように思われます．つまり，このことは，同一時期の東寄りの海域におけるメバチとキハダの分布を比較すると，メバチの方がキハダよりも，より東方にまで及んでいることを意味しています．したがって，このような想定を念頭に入れて，改めて第3図の釣獲率の変化を考えてみると，冷水帯の衰える4, 5月における漁場の位置はキハダの高分布域のそれに一致し，メバチについては，漁場よりもさらに東寄りのところで，分布密度の高くなっている可能性が考えられるわけです．また，冷水帯の発達する8, 9月，10, 11月における漁場の位置は，メバチの高分布域のそれに一致し，キハダについては4, 5 月におけるよりも西寄りへと後退している可能性が考えられるわけです．今のところ，資料が不充分で余り細かい変化は問題にし得ませんが，釣獲率の季節変化と冷水帯の消長との関連については，上述のような想定を行うことによって，或る程度納得のゆく説明が得られるように思われます．

私はさきに，この漁場における漁況の一つの大きな

特徴として，メバチとキハダの分布が重なり合っていることを指摘しましたが，上のように考えてみますと，両者の分布は完全に一致するのではなく，厳密には或る程度喰違っていると考えなければならないことになります．


150°W
140°W
130°W
120°W
110°W
10°
0°
10°
10°N
0°
10°S
4~5月
6~7月
8~9月
10~11月
1%以下
1~3%
3%以上

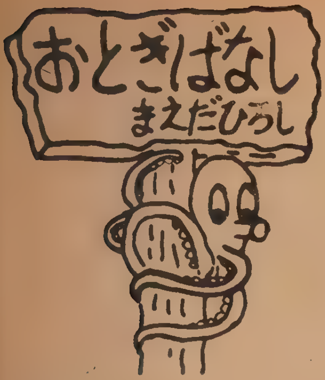
第3図　漁況と海況との関連（B：キハダ）

鮪類標識放流について

◇昭和33年7月16日から9月15日までに放流実施の報告があった船数は3隻（8尾）である．

放流実施船名及び実施の概要

船名	標識番号	放流年月日	放流位置	魚種（尾数）
1 寿々丸	A0516~0520	33. 7. 15	11°N 165°W	めばち (5)
玄洋丸	E0022~0029	33.8.14~8.16	5°—6°N 166°—164°W	きはだ (2)
房総丸	X0032	33. 7. 25	3°N 119°W	まかじき (1)


おとぎばなし
まえだひろし

鯨のたたり

山口県の川尻岬（対馬海峡と日本海の境，本州の北西端）は，いまでこそ一漁村にすぎませんが昔は鯨とりで有名でした．もちろん普通，鯨とりは本カワといって百隻が単位ですがここはその半分の半カワの小規模なものでしたが……．或る夜，その鯨とりのある漁師の夢枕に大きな鯨があらわれて

「私はあす京都まいりにいきたいのですがどうか行きに私をみても捕えないで下さい．そのかわり帰りには必ず捕ってあげますから」

と涙をハラハラ流しながらたのみました．

「よし，よし」

漁師がうなづくと鯨は嬉しそうに海へ帰っていきました．不思議なこともあるものだと思いながら翌朝海に出た漁師は50メートルもあるかと思われる大鯨がゆうゆうと泳いでいるのをみつけました．漁師は約束もわすれて7人の腕ききを集めいきなり鯨めがけてモリを放ち網をからませて捕ろうとしましたが鯨は少しも弱らず，たちまち海は大嵐になって船もろとも行方をくらませてしまいました．僚船の漁師たちはいのちからがら逃げのびていまの山陰地方の特牛（こっとい）に住みつきましたが，7人の行方はようとして分りませんでした．山口県豊北町の矢玉（やたま）と和久（わぐ）にはその時の7人のお墓がいまでものこっています．

アワビとムイ

津軽海峡の北海道岸の東端，汐首岬では海峡を西から東に向う津軽暖流と親潮がぶつかりはっきりした潮境（しおざかい）ができます．ちょうどそこに「ムイの島」と呼ばれる島があります．（ムイとはアイヌ語でオオバンヒザラ貝のこと）

昔々，このあたりにはムイとアワビが沢山住んでいてお互いに勢力争いをしていましたがアワビが負けてこの島から東にはアワビがひとつもいなくなったといわれています．

オオバンヒザラ貝はアワビの害敵でアワビの殻の息抜きの穴をふさいで殺してしまいます．ふつう潮境は海の生物の分布の境界線になっていますからここにムイとアワビが一しょにいなくても不思議ではないのですが，昔の人はこんな面白いお話にしてあらわしています．

（北海道函館風師泊にて）

業界メモ

1958年8月～9月

8月29日　ビン長新漁場を発見

イン度洋の S 25° 線にビンチョウの新漁場が発見されかなりの漁があったと東海大学水産研究部から発表された．それによると7月下旬頃より，福久丸（350トン）他1隻はE 61°，S 24—26° の水温 20.5—22° の水帯を調査し1日500—1300貫のビン長を漁獲魚体は5—7貫程度で漁獲率はかなり良いといわれる．同水研では従来インド洋の漁場は殆んど赤道を狭んだ南北15度の間であったが，今度の操業結果からインド洋キハダの漁閑期にビン長を狙えば濠洲西方海域からマダガスカル島に至る南緯20—25度に東西に長く出来るのではないかといっている．

（日本水産）

9月9日　放射能異常なし（相模丸初縄開始）

8月中旬三崎を出港東部太平洋に向った神水試相模丸（700トン）は8日初縄を開始したと連絡があった．漁場は南緯7度西経113度で初縄の成績はキワダメバチなど約4.857トン（1300貫）目標の5.625トン（1500貫）を若干下回ったがまだこれからと楽観的，なお同船はガイガーカウンターを搭載して毎日空中，水中の放射能状態を観測しながら漁場に向ったが今のところ異常は全く認められなかった．

（港報）

9月10日　菅野進氏（本会々長）帰国す

去る8月1日空路アメリカの漁業調査に赴いた神奈川県鰹鮪漁業者協会長菅野進氏（日魯漁業三崎営業所長）は12日羽田空港に帰着する．同氏は焼津漁協組の滝口専務とアメリカ各地の鮪流通関係や市場加工場冷凍工場等を視察して来た．（港報）

9月10日　鮪対米直輸出に許可制

マグロ漁船からの漁獲物を対米向け直輸出されるものについては我国のマグロ産業と輸出振興上抑制措置がとられたがこれはマグロ漁業の発展を阻害しかねないので水産庁ではこのほど許可制を採用することにきめた．

1. 陸揚許可は1回毎に外務省通産省と協議して行う．（米領サント，サモア両島は除く）．
2. 我国のマグロ漁業，マグロ類の輸出振興に支障があると認められる場合は許可しない．
3. 漁獲物を他船へ転載したり又は他船より転載することは認めない．
4. 大西洋に於いて操業するものについては内地出港前にその漁獲物の対米以外の陸揚許可を受けたものでなくては認めない．（新水産，港報）

9月11日　ハワイ南方に危険区域

水産庁から三崎漁業無線局に対し 0°—W159°，N 3°30′—W159°，N 3°30′—W156°，0°—W156°の4点を結ぶ海域は8月20日以降さらに告示するまで核実験のため危険区域となる旨連絡があった．なお現在太平洋上における核実験の危険区域はこの海域のみ．

（港報）

9月17日　アルゼンチン沖でマクロ操業

アルゼンチンに出漁している日東，北光の合併会社であるアグロラ．アストウル会社（伊沢義一郎社長）では最近ようやく現地操業の見通しがつき18日伊沢社長は現地へ飛び具体的計画をねる．さらに同氏は報国水産の永盛丸（308トン）をチャーターしてアルゼンチン沖でマグロ延縄漁業を行うことにした．永盛丸は来月中旬現地へ向う予定．基地はブエノスアイレスの南方マルデル．アロウタ港とする．マグロ漁業については底曳船ホカ号（旧日東丸）が試験操業の結果好漁で市場もよいことが判明したためである．

（日東水産）

9月27日　照洋丸10月末再び大西洋へ

このほど太平洋マグロ漁場の調査から帰った水産庁調査船照洋丸は10月末再び大西洋のマグロ資源の調査に出港する．同船は大西洋ではアフリカ沖漁場を主として3月末までの5ヵ月間調査に従事する．

（水経）

鮪　漁　業

1958年10月号

昭和33年10月10日印刷
昭和33年10月10日発行
監修　神奈川県水産試験場調査部
編集兼発行人　菅野　進
神奈川県三浦市　神奈川県水産試験場内
発行所　鮪漁業研究会
（振替貯金口座 横浜 1472）

比重調整
樹脂加工　**クレモナまぐろロープ**

特徴
① まぐろの喰ひ良い
② 毎航海のタール染不要
③ 他の追随を許さぬ耐久力と耐摩耗力

営業種目……クレモナ、綿延縄及仕立、漁具一式、救命筏

アサヒテツクスロープ株式会社

本社　東京都三鷹市下連雀四〇〇番地　電話 武蔵野 3978•7923番
出張所　神奈川県三浦市三崎町花暮一四四番地　電話 三浦 2957番

漁船の氷、餌料の仕込は

三崎漁連へ　砕氷設備毎時50屯2基完備

（向ケ崎 • 花暮岸壁）

凍結能力 日産 一七屯 ―――― 冷藏収容量 六〇〇屯
製氷能力 日産 五〇屯 ―――― 貯氷能力 五五〇屯

三崎漁業協同組合連合会（製氷冷凍工場）

会長 寺本正一

神奈川県三浦市三崎港 TEL（三浦）2609•2655番

営業品目

商船用・漁船用並びに陸上用無線通信装置の製造

装備・補修一式

七洋電機株式会社

本社　東京都目黒区中目黒4丁目1315番地

電話目黒（712）2525・2526・3314番

太洋無線が世界に誇る

各種
陸上用
航空機用
船舶用

自動方向探知機

太洋無線株式会社

東京都澁谷区衆樂町48番地

電話澁谷（46）代表5283—9番

鋼木船造修一般

500噸船台三基

起重機10噸・5噸各一基

三崎船舶工業株式会社

本社　東京都中央区西八丁堀2の10
電話築地（55）9661～5
工場　神奈川県三浦市三崎町向ケ崎2446
電話（三浦）2880・2934・2343

営　業　種　目

船舶・陸上

冷凍・冷蔵・製氷・冷房

冷凍・冷蔵・製氷工場
急速・空気凍結装置
冷房装置・冷凍機械器具
防熱装置・船舶冷凍冷蔵
設計　製作　施工

協同低温工業株式会社

本　社　東京都千代田区神田佐久間町河岸58（夏目ビル2階）
電話下谷（83）0996番

JRC　漁船用無線装置

常に新しい研究と最高技術に輝く

定評ある送信機
優秀な受信機
新設計の船内拡声装置
超小型魚群探知機

日本の誇り
国産レーダー
漁場の測定に
ロラン受信機
安全航海に
気象模写受信装置

JRC

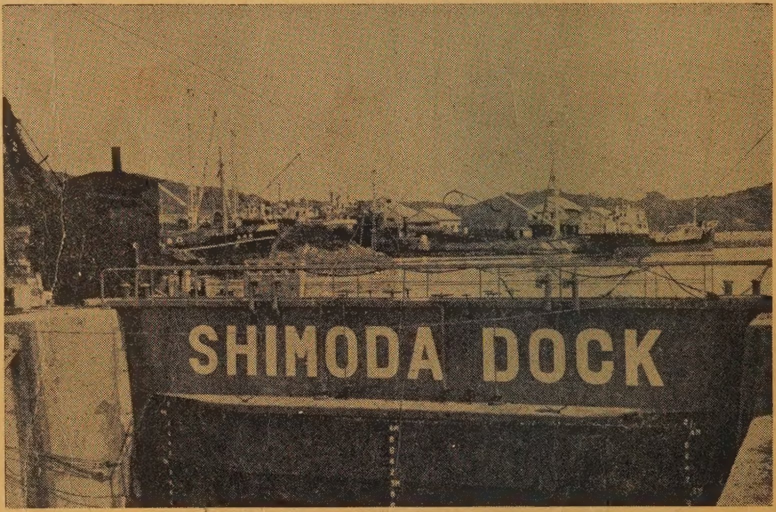
日本無線

本社・工場　東京都三鷹市上連雀930
東京営業所　東京都渋谷区千駄ヶ谷4の693
大阪支社　大阪市北区堂島中1の22

800屯ドライドック完成

船渠	大きさ	長さ	幅	深さ	
		59.15 米	14.0 米	6.6 米	
	入渠可能船舶	長さ（垂線間）	幅（型）	吃水（平均汐高線1.7米に於て）	総屯数
		57.0 米	11.0 米	4.41 米	800 屯

船台兼船架	建造又は上架可能船舶	構造	長さ	総屯数	数量
		4条軌条算盤式	50 米	500 屯	2
		2条軌条式	50 米	250 屯	2



下田船渠株式会社

静岡県下田港　本社事務所　電話下田 1001（代表）～3番　本社現場事務所　電話下田1005（代表）～6番
武ヶ浜工場　電話下田 1008（代表）～9番
東京事務所　東京都中央区銀座東4－4 畜産会館1階　電話東京（54）9270（直通），4121（代表）－2

船出の支度
石油は出光で

安全快適な航海の為に
是非・・・・・

出光興産株式会社

本社　東京・銀座東四丁目
三崎出張所　三浦市三崎町海南　電話三浦432

鮪漁業　第五十三号　昭和三十三年十月十日発行　（毎月一回十日発行）
昭和三十一年二月二十三日　第三種郵便物認可